

科目等履修生・聴講生 講義一覧

【授業時間】

①限 8:50～10:20 ②限 10:30～12:00 ③限 12:50～14:20 ④限 14:30～16:00 ⑤限 16:10～17:40

【科目一覧】

頁	開講期	科目名	教員名	曜日	時限	受講可否	
						科目等履修生	聴講生
1	前学期	環境学	中尾誠二/矢口芳生/塩見直紀	火	①	○	○
3	前学期	管理会計論	遠藤 尚秀	金	③	○	×
5	前学期	企業論	平野 真	月	④	○	○
7	前学期	教育学	江上 直樹	月	④	○	○
9	前学期	グローバル特講Ⅰ（公共経営演習Ⅰ）	谷口 知弘/杉岡 秀紀	金	③	○	○
11	前学期	経営学入門	加藤 好雄	金	②	○	○
13	前学期	経営管理論	篠原 正人	月	③	○	○
15	前学期	簿記演習Ⅰ	遠藤 尚秀	火	②	○	×
17	前学期	交流居住論	塩見 直紀	火	②	○	○
19	前学期	財務諸表論	吉田 周邦	水	②	○	×
21	前学期	人的資源管理論	篠原 正人	月	②	○	○
23	前学期	数学基礎Ⅰ	神谷 達夫	金	④	○	○
25	前学期	政治学	富野 暉一郎	月	③	○	○
27	前学期	生物学	芦田 信之	月	③	○	○
29	前学期	税務会計	遠藤 尚秀/三好 ゆう	水	④	○	○
31	前学期	多文化共生論	平野/矢口/芦田/三品/篠原/エリック/張	水	④	○	○
33	前学期	地域イノベーション	平野 真	月	①	○	○
35	前学期	地域資源論	谷口 知弘	水	④	○	○
37	前学期	地域文化論	井口 和起	月	⑤	○	○
39	前学期	地域防災論	福島 貞道	火	③	○	○
41	前学期	グローバル特講Ⅲ（地方行財政）	福島 貞道	火	⑤	○	○
43	前学期	中小企業論	佐藤 充	金	②	○	○
45	前学期	統計学	三品 勉	木	②	○	○
47	前学期	農業経営論	塩見 直紀	水	④	○	○
49	前学期	プログラミングⅠ	神谷 達夫	金	③	○	○
51	前学期	簿記論Ⅰ	吉田 周邦	火	③	○	×
53	前学期	保健体育	芦田 信之	水	①	○	○
55	前学期	マーケティング	加藤 好雄	金	④	○	○
57	前学期	流通システム論	佐藤 充	火	②	○	○
59	前学期	歴史学	井口 和起	月	②	○	○
61	後学期	観光まちづくり論	谷口 知弘	水	④	○	○
63	後学期	行政学	富野 暉一郎	金	②	○	○
65	後学期	グリーンツーリズム論	中尾 誠二	月	②	○	○
67	後学期	グローバル特講Ⅱ（外国文化論）	井口 和起	火	①	○	○
69	後学期	グローバル特講Ⅱ（公共経営演習Ⅱ）	谷口 知弘/杉岡 秀紀	金	③	○	○
71	後学期	グローバル特講Ⅱ（社会学）	中尾 誠二	月	⑤	○	○
73	後学期	グローバルビジネス	平野 真	月	①	○	○
75	後学期	経営工学概論	三品 勉	木	②	○	○
77	後学期	経営分析	遠藤 尚秀	火	②	○	×
79	後学期	経済学入門	三好 ゆう	火	②	○	×
81	後学期	原価計算論	遠藤 尚秀	金	②	○	×
83	後学期	公共経営入門	杉岡 秀紀	水	③	○	○
85	後学期	自治体政策法務	福島 貞道	水	②	○	○
87	後学期	社会調査論	佐藤 充	水	③	○	○
89	後学期	診療情報管理特論	星 雅文	木	⑤	○	○
91	後学期	数学基礎Ⅱ	三品 勉	水	④	○	○
93	後学期	地域協働論	杉岡 秀紀	金	②	○	○
95	後学期	地理学	福島 貞道	水	④	○	○
97	後学期	日本経済論	齋藤 達弘	月	④	○	×
99	後学期	プログラミングⅡ	神谷 達夫	金	③	○	○
101	後学期	文学	井口 和起	月	②	○	○
103	後学期	簿記論Ⅱ	吉田 周邦	火	③	○	×

科目名称 (Course Title)				担当教員(Instructor)	
環境学				矢口芳生 / 中尾誠二 / 塩見直紀	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	1 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
自然科学・人文科学・社会科学の知見を人間の生活との関係において講じ、人間の生活を取り巻く自然・地域・地球環境の密接な関係を明らかにし、人間と自然・環境との共生の必要性について学ぶ。 講義で具体的に取り扱う内容は、地球温暖化・酸性雨・オゾン層破壊等の地球環境問題、公害・環境汚染問題、ごみ・水問題、企業の環境経営、環境教育等に及ぶ。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
自然科学・人文科学・社会科学の知見を総合的に応用し、生活のあり方を再考することにより、人間の生活を取り巻く自然・地域・地球環境との密接な関係に支障を生じさせないようにすることの重要性を理解するとともに、人間と自然・環境との共生の必要性について理解できるようにする。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	はじめに (矢口)				
第 2 回	地球環境、何がどう問題？ (矢口)				
第 3 回	公害と環境汚染 (矢口)				
第 4 回	地球温暖化の科学と政治 (矢口)				
第 5 回	小括 (矢口)				
第 6 回	酸性化する大気と海洋 (塩見)				
第 7 回	石油は40年でなくなるのか？ (塩見)				
第 8 回	オゾン層破壊がもたらすこと (塩見)				
第 9 回	生態系の危機 (塩見)				
第 10 回	小括 (塩見)				
第 11 回	あふれるごみ (中尾)				
第 12 回	水の危機の時代 (中尾)				
第 13 回	企業と環境経営 (中尾)				
第 14 回	環境教育の目指すもの (中尾)				
第 15 回	小括 (中尾)				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
① 各回の講義内容について事前に予習をしておくこと					
② ニュースや新聞に絶えず目を向けておくこと					

成績評価の方法と基準 (Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
毎回配布する授業シート (50%) 小括時時の試験 (50%)	秀：必要なキーワードを過不足なく用いて、論理的に客観的な説明ができ、かつ、問題点を的確に指摘できている 優：キーワードを用いながら論理的に客観的な説明ができ、かつ、問題点を理解している 良：おおよその説明はできており、かつ、問題点を理解している 可：しくみや問題点の説明において、最低限の水準を満たしている 不可：しくみや問題点が説明できていない
テキスト (Textbook)	【書名】 新訂 地球環境の教科書10講 【著者】 九里徳泰・左巻健男・平山明彦 【出版社】 東京書籍 【出版年】 2014
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	適宜紹介する
備 考 (Other Information)	3分の1以上（6回以上）の欠席は、単位不可とする
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	各担当教員の研究室前に掲示したTel/Mail等へ連絡 もしくは在室時に直接面談

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
管理会計論				遠藤 尚秀	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	3 年次	講義	無	科目等履修
授業の概要(Course Description)					
様々な組織（民間企業、非営利組織、行政）における各種意思決定、短期・中長期の計画設定、業績管理に資する管理会計は、「組織経営の共通言語」であり、経営管理の中核を占める会計分野の重要なツールである。 本講義の流れは、組織における経営戦略や経営管理上の課題を概観したのち、個別分野ごとの諸課題に対応すべく、具体的な管理会計の基礎理論、技法を確認する。					
授業の到達目標(Course Objectives)					
本講義の目的は、外部環境の著しい変化に対応し、様々な経営資源（人、もの、お金、情報等）を使って組織を運営するにあたり、各階層の経営管理者が、どのようなプロセスで経営戦略や経営管理を実践しているのかについて、理解することにある。具体的には、以下の2点を最終到達目標とする。 (1) 管理会計の基本的な理論と技法について習得する。 (2) 具体的な管理会計上の諸課題に対応できる基礎力を養う。					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	管理会計の体系と特徴（第1章）				
第 2 回	財務情報分析（第2章）				
第 3 回	短期利益計画とCVP分析（第3章）				
第 4 回	予算管理（第4章）				
第 5 回	資金管理とキャッシュフロー管理（第5章）				
第 6 回	差額原価・収益分析（第8章）				
第 7 回	中間まとめと事例研究				
第 8 回	小テスト及び解説				
第 9 回	原価維持・原価改善①（第13・14・15章）				
第 10 回	原価維持・原価改善②（第13・14・15章）				
第 11 回	事業部制組織の業績評価（第6・7章）				
第 12 回	個別構造計画と設備投資の経済性計算（第9章）				
第 13 回	戦略的事業計画（第10章）				
第 14 回	バランス・スコアカード（第12章）				
第 15 回	総まとめ				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
① 指定したテキストの次回の講義内容に関する章を事前に読んでおくこと。 ② 小テスト、期末試験（振り返り）を実施するので、授業終了後は管理会計の全体像を意識し、テキストや授業で配布した資料を十分に読み込み、都度、復習をすること。 ③ ニュースや新聞に絶えず目を向けて、様々な組織における経営課題についての問題意識を養うこと					

成績評価の方法と基準(Grading)		
評価方法	(割合)	評価基準
期末試験 小テスト 受講態度	(60%) (30%) (10%)	秀：様々な分野における管理会計の理論に関して、必要なキーワードを過不足なく用いて、論理的に客観的な説明ができ、課題を的確に解決できている。 優：キーワードを用いながら論理的に客観的な説明ができ、かつ、課題を理解している。 良：おおよその説明はできており、かつ、課題を理解している。 可：理論や課題の説明において、最低限の水準を満たしている。 不可：理論や課題が説明できていない。
テキスト (Textbook)		【書名】 管理会計レクチャー (基礎編) 【著者】 門田 安弘 (編著) 【出版社】 税務経理協会 【出版年】 2008年5月
参考書・資料等 (Supplementary Reading)		必要に応じてレジュメや事例等を配布する。 適宜、参考文献を紹介する。
備 考 (Other Information)		3分の1以上（6回以上）の欠席は、単位不可とする。 簿記論や会計学の学習経験があることが望まれる。工業簿記、原価計算論、その他経営学科目も履修することが望ましい。 一方通行の授業とならぬように、可能な限り双方向の授業を実施するため、積極的な参加を望む。 授業には、教科書その他、電卓も持参すること。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)		具体的なオフィスアワーの曜日・時限については、オフィス前に掲示しておく。 質問があれば下記のメールでも適宜、受けつける。 Email: endo-naohide@fukuchiyama.ac.jp

科目名称(Course Title)				担当教員 (Instructor)	
企業論				平野 真	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	2 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要(Course Description)					
企業とはどのような考えのもとに、どのように運営されているのだろうか？本科目では、現代の企業経営を理解するため、1) 経営哲学、2) 事業分野・事業内容、3) 事業規模と発展段階、4) 産業構造や社会での位置付け、という4つの観点から、分析を行う。より具体的には、1) 事業の発展性と継続性のバランスの取り方、2) 事業内容に依存した経営手法の違い、3) 事業の規模や発展段階に応じた組織運営の違い、4) 産業構造や地域社会の中で果たす役割などを学習し、これらの因子の違いから実際の企業がどのように運営されているか理解することを目的とする。前半の授業では理論的な学習を行い、ケース課題の分析を通じて理解を深める。後半の授業では現実の企業をチームで調査・分析することを通じて、さらに企業への理解力・分析力を養う。なお授業の進め方や評価手法については、多少の変更を行うことがある。					
授業の到達目標(Course Objectives)					
1)経営哲学の違いにより現実の企業経営がどのように影響を受けるかについて説明し、具体的な事例を挙げることができる。2)事業分野や事業内容の違いによる企業経営の在り方の違いを例をあげて説明できる、3) 事業の規模や発展段階の違いによる組織運営の違いを説明できる、4) 産業構造や社会の中で果たす役割と企業経営の最適性について、自分の考えを述べられる。					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	オリエンテーション、第一部企業経営の基礎 (1) 企業とは？				
第 2 回	第一部企業経営の基礎 (2) 経営の基礎：分業と分配				
第 3 回	第一部企業経営の基礎 (3) 経営哲学：発展か継続か、ベンチャー型と老舗型				
第 4 回	第一部企業経営の基礎 (4) 事業分野と事業内容：産業特質と製品寿命				
第 5 回	第一部企業経営の基礎 (5) 事業規模と事業の発展：企業の成長と課題				
第 6 回	第一部企業経営の基礎 (6) 価値の体系と産業構造：垂直統合と水平分業、				
第 7 回	第一部企業経営の基礎 (7) 産業構造の変容：製造業からサービス業へ、				
第 8 回	第一部企業経営の基礎 (8) 地域社会と企業：産業集積、協働、企業文化				
第 9 回	第一部の復習とまとめ				
第 10 回	中間テストによる知識確認				
第 11 回	第二部企業分析 WSチーム分けとテーマの選択				
第 12 回	第二部企業分析 WS作業と発表準備				
第 13 回	第二部企業分析 WS発表会 1				
第 14 回	第二部企業分析 WS発表会 2				
第 15 回	総復習とまとめ				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
前半は毎回、次回の予習を兼ねた事例分析などを宿題として課す。しかし授業で特に重要なのは復習である。授業で学習した内容がよく理解できない場合は、必ず次回に質問して理解を深めるようにする。途中で理解を確認するテストがあるので、この準備をすることを通じ、忘れないうちに学習した知識を整理すること。後半は、チームごとに、主体的に調査や分析、発表の準備を行う。					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
宿題や授業中の発言など (20%) 中間テスト (20%) チーム発表 (20%) 最終テストまたは レポート(40%)	秀：適切に問題点を指摘し、特筆すべき鋭い分析や考察ができ、 現実的な解決策を提示できる 優：授業で学習したことを良く理 解でき指摘した問題点に対し適切な解決策を提示できる 良：授 業で学習した内容を基本的には理解でき、指摘した問題点に対し 解決策を提示できる 可：授業内容の理解、問題点の指摘と解決 策の提示が、最低限の水準を満たしている 不可：授業の内容が 理解できておらず、問題点や解決策の提示ができない、あるいは 3分の1を超えて欠席した
	【書名】 【著者】 【出版社】 【出版年】 授業で配布するレジュメを中心に行う。
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	経営能力開発センター編「経営学検定試験公式テキスト1」中央 経済社（就職対策として、資格の取得に興味のある人に役立 つ。） 基本的には、講義のレジュメの中で、参考文献を紹介する。
備 考 (Other Information)	3分の1以上（6回以上）の欠席は、単位不可とする
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	メール連絡 hirano-makoto@fukuchiyama.ac.jp

科目名称(Course Title)				担当教員 (Instructor)	
教育学				江上 直樹	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	1 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
ひとえに「教育学」といっても、そこには教育哲学・教育史・教育方法学・教育心理学・教育社会学・教育法学・教育行政学・比較教育学等の様々な学問領域が存在する。本講義では、それら教育学の各種領域について入門的な内容を紹介するとともに、現在の教育に関する論点について具体的な事例を取り上げて各テーマについて検討する。 教育という営みは、現代社会で生活するうえで誰しもが経験するものであり、教育問題について思索する際に、自身の経験のみをその根拠として議論を行う者も少なくない。しかしながら、その教育問題の背景には、人間個々の問題から法制度等の社会的な背景まで様々な論点が存在する。そこで本講義では、教育学の各種領域についての基礎的な知識を習得することともに、現代的な教育問題について主体的に思索する機会を提供し、教育について多面的な観点から考察を進めることができるようになることをその目的とする。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
①教育学の各種領域について、その概要を簡単に説明することができるようになる。 ②教育に関する問題について、多面的に問いを立てることができるようになる。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	オリエンテーション（講義の進め方、評価方法）、教育学の各種領域について				
第 2 回	教育の意義と目的				
第 3 回	教育思想①（ソクラテスの産婆術、コメニウスの大教授学、ルソーの子ども観）				
第 4 回	教育思想②（ペスタロッチの開発教授、ヘルバルトの教授法、デューイの児童中心主義）				
第 5 回	教育史①（古代ギリシア～古代ローマ～中世ヨーロッパ～産業革命期の近代公教育へ）				
第 6 回	教育史②（日本の教育史：古代の学校～中世の学校～学制による近代公教育制度の確立）				
第 7 回	教育制度①（教育制度の基本原則、教育における法律主義）				
第 8 回	教育制度②（日本の教育行政組織）				
第 9 回	教育制度③（教員の養成・採用・研修）				
第 10 回	教育課程①（学習指導要領の変遷）				
第 11 回	教育課程②（学校で身につける能力とは）				
第 12 回	教育方法①（授業の歴史、授業のデザイン）				
第 13 回	教育方法②（教育の評価）				
第 14 回	その他の教育上の論点				
第 15 回	まとめ				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
各講義において予習用の資料を配布するので、それを読み次回の授業に備えること。 （講義では予習してきたことを前提として、履修者に発言を求める機会を設ける）					

成績評価の方法と基準 (Grading)		
評価方法	(割合)	評価基準
授業への貢献度	(30%)	●授業への貢献度：出席状況、授業時の発言、グループワーク時の取り組み姿勢、受講態度等を総合的に判断する。 ●小課題：講義の節目ごとに小課題を提示する。小課題については主に提出の有無を重視する。 ●期末試験：講義で紹介した基本事項について簡単に説明できるかどうか、現在の教育問題について教育学的背景に基づきながら論点を整理し自身の意見を論じることができるか、といった点を評価のポイントとする。
小課題	(20%)	
期末試験	(50%)	
テキスト (Textbook)		【書名】 【著者】 【出版社】 【出版年】
参考書・資料等 (Supplementary Reading)		授業時に適宜配布、提示する
備考 (Other Information)		
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)		研究室（4号館4階5研究室）へはいつでも訪問してよいが、席を外している場合も多いので、面談等を希望する場合はメール等（egami-naoki@fukuchiyama.ac.jp）で事前に連絡するのが望ましい。

科目名称 (Course Title)				担当教員 (Instructor)	
グローバル特別講義Ⅰ（公共経営演習Ⅰ）				谷口 知弘 / 杉岡 秀紀	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	1 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
阪神淡路大震災を契機に行政セクターを補完する市民セクターが大きな役割を担う力を有することが明らかとなった。加えて、近年は社会起業家やソーシャルビジネスへの注目が集まっている。このように、社会課題の解決や未来創造において異なるセクターが協働するマルチパートナーシップは不可欠となってきた。 一方、マルチパートナーシップによる地域経営は始まったばかりであり多くの課題を抱えている。そこで、「グローバル特別講義Ⅰ」と「グローバル特別講義Ⅱ」では、市民セクター、企業セクター、行政セクターの現場からの報告より、各セクターの役割や課題、可能性を探求し、福知山市を中心に北近畿におけるマルチパートナーシップのあり方や仕組みについて議論する。 本講義においては、福知山市からゲストスピーカーをお招きし、それぞれの立場からのお話をいただく。原則として2回で1テーマを取り上げ、後半はワークショップとする。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
公共を担う最も重要な主体である行政セクターの多様な役割や重要性、具体的な姿を理解する。福知山市の行政活動の状況を認識し、その課題を把握する能力を養う。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	講義の概要と福知山の概要				
第 2 回	福知山市の総合計画と自治基本条例①（福知山市）				
第 3 回	福知山市の総合計画と自治基本条例②(ワークショップ)				
第 4 回	福知山市の防災①(福知山市)				
第 5 回	福知山市の防災②(ワークショップ)				
第 6 回	福知山市の地域協議会①(福知山市)				
第 7 回	福知山市の地域協議会②(ワークショップ)				
第 8 回	福知山市の子育て支援①(福知山市)				
第 9 回	福知山市の子育て支援②(ワークショップ)				
第 10 回	福知山市の観光①(福知山市)				
第 11 回	福知山市の観光②(ワークショップ)				
第 12 回	福知山市の行政改革①(福知山市)				
第 13 回	福知山市の行政改革②(ワークショップ)				
第 14 回	福知山市の議会(福知山市)				
第 15 回	まとめ：ワークショップ「福知山市の未来を描こう」				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
予習：各回のテーマについて、文献やインターネットによる調査、自身の関心を整理するなどあらかじめ学習しておくこと。 復習：講義で得た気づきや成果をレポートにまとめること。 また、日常的に新聞を読むなど広く社会の動きに関心を持ち、福知山市を中心に北近畿の公共政策に関わって関心や問題意識を高めること。					

成績評価の方法と基準（Grading）	
評価方法 （割合）	評価基準
クラスへの貢献（50%） 期末レポート（50%）	秀：行政の役割と各分野の事業内容を理解して、問題点を的確に指摘でき、かつ、問題解決の優れた政策を提示できる。 優：行政の役割と各分野の事業内容を理解して、問題点を的確に指摘し、かつ、問題解決の適切な政策を提示できる。 良：行政の役割と各分野の事業内容を理解して、問題点を的確に指摘できる 可：行政の役割と各分野の事業内容について、最低限の理解はできている。 不可：行政の役割と各分野の事業内容が説明できない。
テキスト (Textbook)	【書名】 【著者】 【出版社】 【出版年】 ※特になし。授業で配布するレジュメを中心に行う。
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	・毎講義のレジュメの中で、適宜、参考文献を紹介する
備　考 (Other Information)	・「グローバル特別講義Ⅱ（公共経営演習Ⅱ）」と合わせて履修することが望ましい。 ・詳細は変更する可能性があるので、後日掲示板で連絡する。 ・ゲストの都合により、変更がありうるので掲示に注意すること。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	・ sugioka-hidenori@fukuchiyama.ac.jp（杉岡）、 taniguchi@co-design.info（谷口）

科目名称(Course Title)				担当教員 (Instructor)	
経営学入門				加藤 好雄	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	1 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
経営とは、組織や事業を運営・管理することである。組織には企業をはじめ、病院や行政組織も含まれてくる。また、事業（プロジェクト）には大規模な事業から身近なプロジェクトまで様々かたちで存在している。 本講義では、様々な側面をもつ経営について、「制度の選択」「戦略の形成」「組織の枠組みづくり」「組織における人間の対応」の4つの領域に整理して進める。また、経営学を学ぶための手法であるケーススタディについても説明を行う。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
本講義では、以下の3点の知識・能力を習得することを目的とする。 ①経営学の基礎概念を理解している。 ②経営学の基礎的な用語を説明することができる。 ③企業等の経営について適切な用語を用いて説明することができる。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	ガイダンス＋経営学の基礎概念				
第 2 回	ケーススタディによる経営学の学び				
第 3 回	経営学とはどのような学問か				
第 4 回	企業と会社の制度的な特徴				
第 5 回	コーポレートガバナンスと企業の社会的責任				
第 6 回	経営理念、目的と戦略				
第 7 回	企業戦略				
第 8 回	競争戦略と事業システム				
第 9 回	組織構造				
第 10 回	組織文化				
第 11 回	コンフリクトのマネジメント				
第 12 回	リーダーシップ				
第 13 回	モチベーション				
第 14 回	もっと深く経営学を学ぶために				
第 15 回	まとめ				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
基礎概念・用語・知識は講義によって学ぶが、理解を深めるために講義内で指示した課題等を行うこと。また、小テストと期末試験を行うので、テキストや講義時に配布した資料の復習は必ず行うこと。					

成績評価の方法と基準(Grading)		
評価方法	(割合)	評価基準
期末試験 小テスト 2回	(60%) (40%)	秀：「授業の到達目標」を非常に高いレベルで満たしている。 優：「授業の到達目標」を高いレベルで満たしている。 良：「授業の到達目標」を十分に満たしている。 可：「授業の到達目標」を満たしている。 不可：「授業の到達目標」を満たしていない。
テキスト (Textbook)		【書 名】経営学入門 【著 者】藤田誠 【出版社】中央経済社 【出版年】2015年
参考書・資料等 (Supplementary Reading)		必要な資料は講義中に配布する。
備 考 (Other Information)		小テストと期末試験で成績の評価をする。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)		第1回目の講義で説明する。

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
経営管理論				篠原 正人	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	2 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要(Course Description)					
1回生担当の「経営学入門」を基礎に、それをさらに進めて、企業あるいは行政組織における経営管理（マネジメント）の理論を学ぶ。 授業の土台はP. ドラッカーの「マネジメント」に置き、他の理論家の説にも触れながら、実際になされている業務に沿って授業を進める。 授業の重点は、学説よりむしろ企業・行政組織の経営に合致した、実践的なものとする。 従って授業においては、教科書輪読に加え、実際に社会で起こっている経営的事象を題材にして、実践的な知識を身に付けることとする。 授業は原則として教科書に沿って進め、履修者が自らその内容を予習し、授業中に自らそれを解説するという能動的な態勢を取る。さらに、履修者が自分で調べてきたテーマを、発表する機会を多く設ける。					
授業の到達目標(Course Objectives)					
1) 企業や行政組織がどのような考え方に基いて運営されているのかを理解している。 2) 組織の中で人が効率よく働くために、どのような仕組みが必要かを理解している。 3) 組織の成長を促すために、どのような革新が必要かを理解している。 4) 西洋的経営と日本的経営の比較ができる。 5) 人前で自分が考察した結果を適切に発表できる。					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	経営管理とは何か				
第 2 回	経営学の理論の変遷：主な理論の復習				
第 3 回	事業の目的とは				
第 4 回	行政組織とNPOの目的とは				
第 5 回	人のマネジメント				
第 6 回	社会的責任				
第 7 回	経営者・マネジャーの役割				
第 8 回	意思決定とコミュニケーション				
第 9 回	マネジメント組織				
第 10 回	会計・税務と財務				
第 11 回	合併と統合				
第 12 回	西洋的経営と日本的経営				
第 13 回	経営問題ケーススタディー（1）				
第 14 回	経営問題ケーススタディー（2）				
第 15 回	授業のまとめ				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
経営の実際を学ぶ機会を見つけ、理論と照らし合わせてみる。 特に、実践的教育を通じて地域連携の中で企業や官庁の経営の実態を学ぶ。 新聞や雑誌を通じて、社会で起きている経営問題に関心を持つ。 人前で発表できるよう練習をする。					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
授業への貢献度 (50%) 課題 (50%) を基本とする。	秀：必要なキーワードを過不足なく用いて、論理的・客観的な説明ができ、かつ、問題点を的確に指摘できている 優：キーワードを用いながら論理的・客観的な説明ができ、かつ、問題点を理解している 良：おおよその説明はできており、かつ、問題点を理解している 可：経営管理の仕組みや問題点の説明において、最低限の水準を満たしている 不可：経営管理の仕組みや問題点が説明できていない
テキスト (Textbook)	【書名】 「マネジメント」エッセンシャル版 P. ドラッカー 【出版社】 ダイヤモンド社 【出版年】 2001年
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	日本経済新聞 エコノミスト 週刊ダイヤモンド その他、講義の中で適宜参考文献を紹介する
備考 (Other Information)	大学教育は「教えてもらう」ものではなく、学生が自分で学習するのを教員が「アシスト」するのだという原則を貫く。 課題レポートを提出しなかった者は単位付与付加とする。 3分の1以上（6回以上）の欠席は、単位付与不可とする
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	メールでアポイントを取ること。 (アドレスは授業で伝える)

科目名称 (Course Title)				担当教員(Instructor)	
簿記演習 I (会計実務 I)				遠藤 尚秀	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	2 年次	講義	無	科目等履修
授業の概要 (Course Description)					
工業簿記は、製造業の経営活動を複式簿記により記録・計算し、その結果を明らかにすることが中心となる。工業簿記は、商業簿記と同じく、会社の資産、負債、純資産の増加・減少を記録・計算し、それらを財務諸表へ表示することが主たる目的でもある。しかし、工業簿記は商業簿記と異なり、経営内部活動としての製造活動から生じる様々な取引の記録・計算が含まれる点に特徴がある。経理実務で工業簿記の知識を十分に活用できるように、毎回、演習問題を数多く解き、問題のポイントをわかりやすく解説するとともにキーワードの再確認をおこなう。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
工業簿記・原価計算の基礎的理解と記帳ができる。 日商簿記 2 級 (工業簿記) の検定試験を合格できるレベルに到達する。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	ガイダンス・演習：工業簿記の仕組み				
第 2 回	演習：材料費				
第 3 回	演習：労務費				
第 4 回	演習：経費				
第 5 回	演習：製造間接費				
第 6 回	演習：部門費				
第 7 回	演習：個別原価計算				
第 8 回	演習：総合原価計算（1）				
第 9 回	演習：総合原価計算（2）				
第 10 回	演習：標準原価計算				
第 11 回	演習：原価・営業量・利益関係の分析				
第 12 回	演習：原価予測の方法				
第 13 回	演習：直接原価計算				
第 14 回	演習：製品の受払い・営業費計算				
第 15 回	総まとめ				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
次回の授業内容について、参考書を用いて予習しておく。 授業終了後、解かなかったワークブックの残りの練習問題を復習して自ら必ず解くこと。 また、複数回実施される小テストで出題された問題も、理解できるまで解くこと。					

成績評価の方法と基準 (Grading)		
評価方法	(割合)	評価基準
小テスト・定期試験 受講態度	(60%) (40%)	秀： 100 - 90点 優： 89 - 80点 良： 79 - 70点 可： 69 - 60点 不可： 59 - 0点
テキスト (Textbook)		【書名】 検定簿記ワークブック2級 【著者】 岡本 清、廣本敏郎 工業簿記 【出版社】 中央経済社 【出版年】 2015年1月 (最新版が出版されれば、最新版を購入のこと)
参考書・資料等 (Supplementary Reading)		岡本 清、廣本敏郎「検定簿記2級工業簿記」 中央経済社 (最新版が出版されれば、最新版を購入のこと) 適宜、参考文献を紹介する。
備考 (Other Information)		原価計算論を履修済みあるいは同時に履修することが望ましい。 3分の1以上 (6回以上) の欠席は、単位不可とする。 講義及び試験には、電卓を携行すること。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)		メールによる予約。

科目名称 (Course Title)				担当教員(Instructor)	
交流居住論（旅行業務Ⅰ）				塩見 直紀	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	3 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
日本の農山漁村の置かれている現状を踏まえ、都市農村交流や移住定住がもつ農村地域再生の可能性と現代的意義について学ぶ。 具体的な国内の事例（都道府県、市町村、企業、NPO等）を中心に、先進的な取り組みについて研究し、事業を企画する理論と手法を身につける。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
・都市農村交流や移住の取り組みなどの現状と課題について基本的な知識を修得する。 ・交流, や定住促進を通じた地域振興策の概要を身につける。 ・地域資源（地域資源創出）を活かした交流事業や定住促進の独自の企画を立案できる。					
teijyu					
第 1 回	交流居住論の概要と目指す方向性について（オリエンテーション）				
第 2 回	交流、定住をサポートする若手ベンチャーの先進的取り組みに学ぶ(1)				
第 3 回	交流、定住をサポートする若手ベンチャーの先進的取り組みに学ぶ(2)				
第 4 回	交流、定住をサポートする若手ベンチャーの先進的取り組みに学ぶ(3)				
第 5 回	日本の農村の現状と課題について				
第 6 回	日本における旅の歴史（人はなぜ旅をするのか）				
第 7 回	交流とは何か、交流の可能性とは				
第 8 回	交流、定住促進等による地域再生に関するワークショップ（個別プレゼン準備）				
第 9 回	現代の若者のローカル志向について				
第 10 回	空き家対策について				
第 11 回	地域資源を活かしたローカルビジネスの創造について				
第 12 回	選ばれる農村とは				
第 13 回	地域資源調査とブランディングと情報発信について				
第 14 回	クリエイティブ人材の創造性発揮空間としての農村の可能性				
第 15 回	交流、定住促進等による地域再生に関するプロジェクト 個別プレゼンテーション				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
・観光、交流、移住、定住に関する情報や地域のあり方について、日ごろから問題意識をもつこと。 ・新しい事業や世にない仕組みを自分が創出するという気概をもち、関連書を手にするなど、自己学習をおこなうこと。					

成績評価の方法と基準 (Grading)	
評価方法 (割合) 期末試験 (60%) 毎回の感想・気づき・提案シート (20%) 個別最終プレゼン (20%)	評価基準 秀：必要なキーワードを過不足なく用いて、論理的に客観的な説明ができ、かつ、課題や独自の解決策を的確に指摘できている 優：キーワードを用いながら論理的に客観的な説明ができ、課題を理解し、解決策を提示できる 良：おおよその説明はできており、かつ、課題を理解している 可：課題の説明において、最低限の水準を満たしている 不可：課題が説明できていない
テキスト (Textbook)	【書名】 【著者】 【出版社】 【出版年】
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	毎講義のレジュメの中で、適宜、参考文献を紹介する
備考 (Other Information)	3分の1以上 (6回以上) の欠席は、単位不可とする。※1回目の授業も5回の欠席に含むので注意
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	毎週1回、オフィスアワーとする。具体的な曜日・時限については、オフィス前に提示しておく。メールでも遠慮なく、連絡してください (conceptforx@gmail.com)

科目名称 (Course Title)				担当教員(Instructor)	
財務諸表論（財務会計論）				吉田 周邦	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	2 年次	講義	無	科目等履修
授業の概要 (Course Description)					
企業は、「一般に公正妥当と認められる企業会計の基準(GAAP)」に準拠して、財務諸表を適正に作成しなければならない。そのためには、企業会計の基準に関する知識や理解が不可欠であり、これにより企業は、様々な企業活動を的確に開示することができる。また企業が、国内やグローバルな市場で活動するためにも、適正な財務諸表を作成する能力が必要である。さらに個人がビジネスパーソンとして「財務諸表を利用する場合」にも、企業会計の基準に関する知識や理解が必須である。当講義は、我が国における一般に公正妥当と認められる企業会計の基準を中心として国際会計基準等のトピックも話題に取り入れつつ、その基礎的な理解を得られるよう、解りやすく解説するものである。授業においては、講述だけでなく演習と双方向の活発なディスカッションを志向する。適宜課題レポートの提出・発表を求め、中間考査・期末試験を実施する。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
「我が国における一般に公正妥当と認められる企業会計の基準」につき、基礎的な理解と知識を得ることができ、上場企業等が開示している財務諸表を自ら利用できる。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	オリエンテーション・財務会計の機能、制度				
第 2 回	会計基準の種類（日本基準・国際会計基準）				
第 3 回	発生主義会計と資産評価基準				
第 4 回	資金運用取引・キャッシュフロー計算書・デリバティブ				
第 5 回	収益認識と販売債権				
第 6 回	棚卸資産と売上原価				
第 7 回	有形固定資産と減価償却・減損会計				
第 8 回	無形固定資産と繰延資産				
第 9 回	前半の総括・中間考査				
第 10 回	負債（引当金・偶発債務etc）				
第 11 回	純資産・株主資本				
第 12 回	公表財務諸表				
第 13 回	連結財務諸表				
第 14 回	外貨建取引等と換算				
第 15 回	全体の総括・期末テスト				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
次回の予習をし、課題を提出すること。					

成績評価の方法と基準 (Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
中間考査・期末試験 (60点) 課題レポート提出・発表 (40点) TOTAL (100点) 中間考査・期末試験の合計が50点未満 (100点満点) の場合、単位を付与しない。 また4回以上欠席の場合、単位を付与しない。	秀：100点 - 90点 優：89点 - 80点 良：79点 - 70点 可：69点 - 60点 不可：59点 - 0点
テキスト (Textbook)	【書名】 財務会計講義 【著者】 桜井久勝 【出版社】 中央経済社 【出版年】 2017年
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	適宜講義において、指示する。
備 考 (Other Information)	簿記論Ⅰ・簿記論Ⅱを履修することが望ましい。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	メールによる予約。

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
人的資源管理論（労務管理論）				篠原 正人	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	3 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要(Course Description)					
人材は、企業のみならず行政、学校、ボランティア団体、クラブ活動など、どのような組織を運営する際にも重要である。 この授業では、組織を円滑に運営するためにどのような人材が必要となるのかについて、基礎的な理論と実際の状況を学ぶ。 また、履修者自らの体験と照らし合わせ、人材をどのように確保し、育成していったらいいのかについて共に考えることとする。 また、新聞などのメディアの情報を駆使し、労務管理（人的資源管理）の実例を基に理論が学べるよう工夫をする。					
授業の到達目標(Course Objectives)					
1) この授業を通じて、履修者は人的資源の重要性とその管理・開発の方法の基礎を習得し、それを理解できている。 2) 履修者が日常接する機会のある労務問題を取り上げて、理論と照らし合わせることができる。 3) 人前で自分が考察した結果を適切に発表できる。					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	社会で働くことの意義について				
第 2 回	人材とは				
第 3 回	労務管理（人的資源管理）についての理論				
第 4 回	人材についての自己体験について				
第 5 回	企業の労務管理（人的資源管理）とは				
第 6 回	採用について				
第 7 回	企業内研修と企業外研修				
第 8 回	自己学習の意義				
第 9 回	会社員や行政職員の一生				
第 10 回	学歴と経営への貢献度				
第 11 回	どのような人材が望まれるか				
第 12 回	賃金体系と昇格				
第 13 回	フリンジベネフィット				
第 14 回	キャリア形成プラン（1）				
第 15 回	キャリア形成プラン（2）				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
自分のライフプランを考えてみる。 すなわち、大学を卒業してから、どのような進路に進み、そこで何の仕事をし、30歳、40歳、50歳、60歳、そして退職後に、自分はいかなる人になっていきたいかを考え、それを可能にする準備は何が必要か、シナリオを書いてみる。 人前で発表できるよう練習をする。					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
授業への貢献度 (50%) 課題 (50%) を基本とする。	秀：必要なキーワードを過不足なく用いて、論理的・客観的な説明ができ、かつ、問題点を的確に指摘できている 優：キーワードを用いながら論理的・客観的な説明ができ、かつ、問題点を理解している 良：おおよその説明はできており、かつ、問題点を理解している 可：経営管理の仕組みや問題点の説明において、最低限の水準を満たしている 不可：経営管理の仕組みや問題点が説明できていない
テキスト (Textbook)	【書名】 「人材マネジメント入門」 【著者】 守島基博 【出版社】 日本経済新聞出版社 【出版年】 2004年
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	日本経済新聞 エコノミスト 週刊ダイヤモンド その他、講義の中で適宜参考文献を紹介する
備考 (Other Information)	大学教育は「教えてもらう」ものではなく、学生が自分で学習するのを教員が「アシスト」するのだという原則を貫く。 課題レポートを提出しなかった者は単位付与付加とする。 3分の1以上（6回以上）の欠席は、単位付与不可とする
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	メールでアポイントを取ること。 (アドレスは授業で伝える)

科目名称 (Course Title)				担当教員(Instructor)	
数学基礎 I				三品 勉	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	1 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
数学の応用分野は極めて広く、少なくとも高校で学んだ基礎数学は大学生として知っておくべき基本知識である。社会に出てその必要性を感じ、その時点で新たに学び直すこともできる。しかし学修効率の面で大きな障害があり勧められない。 本講義では、大学生として身につけておくべき必要な数学を中心に解説する。数や式の扱いから始め、方程式や関数の基礎的な扱いを講義した後、微分や積分について簡単に説明する。またそれらが大学の他の授業でどのように使われるかを学ぶ。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
(1) 高等学校で習得した数学に関する知識を使いこなすことができる。 (2) 大学の他の授業で必要な数学的概念を運用することができる。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	数と式	自然数や整数についての演算規則・式の展開・因数分解			
第 2 回	有理数・実数	有理数と演算規則・実数の基本的性質・指数・対数			
第 3 回	方程式と不等式	方程式と不等式の意味と解法、複素数			
第 4 回	図形の性質	図形の基本的な性質			
第 5 回	関係と関数	関係と関数について			
第 6 回	関数の性質	関数の基本性質			
第 7 回	様々な関数	2 次関数や初等関数とそのグラフについて			
第 8 回	まとめ (1) と中間テスト				
第 9 回	三角関数	三角関数の性質とそのグラフ			
第 10 回	場合の数	場合の数と数学的帰納法			
第 11 回	数列	等差数列、等比数列、階差数列と数列の和の求め方			
第 12 回	極限	極限の考え方			
第 13 回	微分	微分の意味と導関数の求め方			
第 14 回	積分	不定積分、定積分、微分積分学の基本定理			
第 15 回	まとめ (2) と期末テスト				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
授業で学んだテーマについて、関連の問題を必ず解いておくこと。問題はその都度指示する。					

成績評価の方法と基準(Grading)		
評価方法	(割合)	評価基準
授業内試験 授業参加	(90 %) (10 %)	中間テストと期末テスト 議論・質問・コメントによる授業への参加回数
テキスト (Textbook)		【書名】 初歩からの数学(放送大学教材) 【著者】 隈部正博 【出版社】 放送大学教育振興会 【出版年】 2012年
参考書・資料等 (Supplementary Reading)		必要に応じて指示する
備考 (Other Information)		特になし
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)		Eメール

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
政治学				富野 暉一郎	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	2 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
この講義は政治学の入門編です。私たちは毎日様々な政治に関する報道に接しています。でもいったい政治とは何なのでしょう。社会にとってなくてはならない政治ですが、私たちはその重要性について十分な認識を持っていないように見えます。この講義では、社会で起きている政治現象を参考にしながら、現代社会における政治の役割を、民主主義という政治システムを中心に考察します。講義の内容は、実際に社会で起きている現象や事件などを事例に取り入れながら、第二次世界大戦後の政治の対象の変遷、選挙と政治権力、直接民主主義と間接民主主義、権力の分立、政党政治の意義、地方自治、政治参加の諸形態、などを含めるものとなります。					
①現代社会における政治の役割について基礎的な知識を得る。 ②国民主権、市民主権の意味と成立過程を理解する。 ③市民の政治参加と民主主義の関係を理解する。 ④政治における正義とは何か、について相対的な価値判断を身につける。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	イントロダクション (この講義で学ぶこと)				
第 2 回	様々な政治形態、さまざまな政治のレベル				
第 3 回	第二次世界大戦後の日本の政治課題I				
第 4 回	第二次世界大戦後の日本の政治課題II				
第 5 回	国家主権と国際社会				
第 6 回	国家主権と国民主権				
第 7 回	権力の抑制 (憲法、三権分立、世論)				
第 8 回	議院内閣制と大統領制				
第 9 回	政党政治と市民社会				
第 10 回	民主主義におけるリーダーシップ				
第 11 回	政治と情報社会				
第 12 回	グループ討議I				
第 13 回	市長との対話				
第 14 回	グループ討論II				
第 15 回	政治における多元主義と寛容な社会				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
①次回の講義で学ぶテーマについて、指定された文献・資料等を読み込んでおくことを求めます。 (レポート提出を求めることがある) ②グループ討議及び市長との対話については、グループで役割分担を決めて事前学習をしてもらいます。					

成績評価の方法と基準(Grading)		
評価方法	(割合)	評価基準
期末試験 レポート (3回) ミニツツペーパー	(60%) (30%) (10%)	期末試験とレポートについては、①論点が明確に捉えられているか ②講義の内容に即しているか、③論旨に一貫性があるか、の3点について5段階で評価します。また自主的な学習の成果を盛り込んでいると認められるものについては、期末試験で10点以内、レポートで合計5点以内を加点します。
テキスト (Textbook)		【書名】 【著者】 【出版社】 【出版年】
参考書・資料等 (Supplementary Reading)		『始めて学ぶ政治学』岡崎清輝・木村俊道編 ミネルヴァ書房 2014
備考 (Other Information)		
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)		初回の講義で連絡方法を指示します。

科目名称(Course Title)				担当教員 (Instructor)	
生物学				芦田 信之	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	1 年次	講義	無	科目等履修・聴講
授業の概要 (Course Description)					
医療福祉マネジメント学科では、診療情報管理士をめざすにあたり、その業務内容が診療録の管理であり、診療録に記載された病気の診断病名をコーディングすることから、病気に関する知識が不可欠であり、それらに関する専門科目が多く開講されている。それらの学習の前提となる人体の構造と機能の基礎知識があることが望ましい。広い生物学の学習範囲の中から、人体に関する分子生物学や細胞生物学および病原微生物学を題材とした生物学を学ぶ。 地域経営学科の学生も、教養として人体の構造と機能を学ぶ。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
生物の構成成分（タンパク質、核酸、脂質、糖質など）を理解し、生物と無生物の境界が考察できる。細胞の機能と働きを知り、単細胞と多細胞の境界を考察できる。人体の組織、臓器の働きを知り、健全な状態と病的な状態の理解ができる					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	授業ガイダンス、細胞と個体のなりたち 細胞膜と細胞内小器官				
第 2 回	単細胞生物と多細胞生物				
第 3 回	生殖と発生 ひとつの受精卵から 生物は子孫を残す。				
第 4 回	分子生物学からみた生命 生体の機能とタンパク質				
第 5 回	生体内の化学反応と酵素 酵素はたんぱく質でできている。				
第 6 回	遺伝と遺伝情報 DNAの構造と遺伝のしくみ たんぱく質合成のしくみ				
第 7 回	細胞、組織、器官 臓器の働き				
第 8 回	植物生理学のすすめ 動物と植物の違い				
第 9 回	人体生理学 刺激の受容と反応 五感（視覚、聴覚、味覚、臭覚、触覚）と脳				
第 10 回	受容器と効果器 筋肉のはたらき				
第 11 回	受容器と効果器 筋肉のはたらき				
第 12 回	内部環境の恒常性 体液の恒常性				
第 13 回	自律神経系とホルモン 体温の維持、血糖値の調節				
第 14 回	免疫と病原性微生物 細胞性免疫と体液性免疫				
第 15 回	バイオテクノロジーと生命倫理				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
授業計画に書かれている各回のテーマを確認し、必要な予習・復習をすること					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
期末試験 (60 %) 毎講義の確認テスト (40 %)	秀：要求された程度を超えて優秀な成績。基準点として90～100点 優：要求にふさわしく優れた成績。基準点として80～89点 良：要求をみたす成績 基準点として70～79点 可：単位取得を認める合格最低ライン。 基準点として60～69点 不可：合格最低ラインに達しない成績。 基準点として59点以下
テキスト (Textbook)	【書名】 人体解剖図 9. 78442E+12 【著者】 【出版社】 成美堂出版 【出版年】
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	インターネット上には、優れた「生物学」・「人体のしくみ」・「生理学」の教材がある。各回のテーマを確認し、予習・復習すること
備考 (Other Information)	毎回、前回の内容の小テストをおこなう。3分の1以上（6回以上）の欠席は単位不可とする。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	講義終了時またはメールにて質問や相談日時を受け付ける。メールアドレス：ashida-nobuyuki@fukuchiyama.ac.jp

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
税務会計（会計学各論）				遠藤 尚秀 / 三好 ゆう	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	3 年次	講義	無	科目等履修
授業の概要(Course Description)					
本講義の目的は、租税の基礎理論を学んだのち、法人（企業）への課税根拠ならびに法人税法に即した税額計算の方法を理解することにある。 具体的には、租税の存在意義（租税国家、租税法律主義）、法人学説と課税根拠、納税義務者、課税物件、課税物件の帰属、課税標準、税率など各個別要件を学習する。 本講義は、企業会計（主に簿記、財務会計）の知識を前提とするため、これに関わる講義を先に受講しているか、ある程度の基礎知識を有している必要があるので注意すること。 なお、直接、税理士試験対策にはならないが、当該講義を学ぶことで、税理士試験（法人税法）にも役立つように工夫されている。					
授業の到達目標(Course Objectives)					
本講義の目的は、租税法の基礎理論に基づき、税務会計とりわけ法人税法のしくみについて理解することにある。そのうえで、以下の2点を最終到達目標とする。 (1) 法人への課税根拠を理解し、自らの言葉で説明することができる。 (2) 法人税法の基本的なしくみ（課税取得金額・税額計算）を理解し、申告書を作成することができる。					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	税務会計の守備範囲				
第 2 回	租税の基礎理論（租税の本質と租税法律主義）				
第 3 回	法人への課税根拠①（法人の学説）				
第 4 回	法人への課税根拠②（法人の課税の仕方）				
第 5 回	わが国企業の開示制度（計算書類・有価証券報告書・法人税申告書）				
第 6 回	法人税法の基本的しくみ（企業会計と課税所得金額）				
第 7 回	益金の額と計上時期：収益の帰属時期と受取配当等				
第 8 回	益金の額・損金の額と計上時期：棚卸資産の評価、資産の評価損益				
第 9 回	損金の額と計上時期①：減価償却・圧縮記帳				
第 10 回	損金の額と計上時期②：給与等・寄付金・交際費				
第 11 回	損金の額と計上時期③：貸倒引当金等				
第 12 回	税額計算と納税申告①				
第 13 回	税額計算と納税申告②				
第 14 回	税務会計の課題と展望①：わが国の法人税収の動向と負担格差				
第 15 回	税務会計の課題と展望②：わが国の税務会計と国際会計基準				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
① 毎回小テスト、期末試験を実施するので、授業終了後は配布レジメや参考資料等（授業で指定する）で復習をすること。 ② ニュースや新聞に絶えず目を向けておくこと。					

成績評価の方法と基準(Grading)		
評価方法	(割合)	評価基準
期末試験 小テスト	(60%) (40%)	秀：法人税の本質を理解し、具体的な申告書を作成することができる。 優：法人税の基本的しくみならびに、申告書の作成ルールを理解している。 良：おおよそその法人税のしくみを理解している。 可：法人税のしくみの理解において最低限の水準を満たしている。 不可：法人税のしくみを理解できていない。
テキスト (Textbook)		講義でレジメを配布する。 講義中にテキストを指示する。
参考書・資料等 (Supplementary Reading)		下記その他、適宜、参考文献を紹介する。 適宜、参考文献を紹介する。
備考 (Other Information)		3分の1以上（6回以上）の欠席は、単位不可とする。 簿記論Ⅰ、簿記論Ⅱ、簿記演習Ⅰ、財務会計を履修済みであることが望ましい。（単位取得の有無は問わない）。 授業には、毎回の配布レジメその他、電卓も持参すること。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)		基本的に、両教員のオフィスアワーを利用すること。 具体的な曜日・時限については、オフィス前に掲示しておく。 質問があれば下記のメールでも適宜、受けつける。 Email: endo-naohide@fukuchiyama.ac.jp

科目名称 (Subject)				担当教員 (Teacher)	
多文化共生論 (異文化理解)				平野 真、矢口芳生、芦田信之、エリック 張 明軍、三品 勉、篠原正人	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	1 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
経済活動がグローバル化するなかで、外国との交流が不可欠な時代となってきた。一方では、政治情勢の不安定化や経済格差が広がり、保護主義的な風潮も広まってきた。言語、文化、価値観の違いを超えて交流するには、相手の立場を理解し、自分の立場を主張できる能力が必要である。様々な国や民族の文化・歴史・社会制度等の違いや多様性を理解し、多くの国々や人々と共生できる国際社会の実現を目指すため、留学および業務などの海外での生活・暮らし等、実際の滞在経験を基にした知識経験を踏まえた講義により国際感覚を養う。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
多文化共生について理解し、あるいは理解しようとする態度を身につけ、あるいは他者との差異を認識ができるようにすること（他者理解と自己理解）を目指す。海外での滞在経験を踏まえた現地での生活等の様子を数多く紹介することにより、留学や海外での業務上のことだけではなく、海外からの訪問者や留学生、長期滞在者等との国内での交流にも役に立つ知識や作法を身につける。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	多文化共生とは何か（矢口） オリエンテーション、グローバリゼーションと多文化共生				
第 2 回	マイノリティとマジョリティ				
第 3 回	文化共生と社会統合のあり方				
第 4 回	日本人から見た外国の暮らし（三品）	米国で暮らして気がついたこと			
第 5 回		米国の大学ー留学を成功させるためのヒント			
第 6 回	日本人から見た外国の暮らし（篠原）	英国・オランダに住んで			
第 7 回		ヨーロッパと日本のビジネス文化			
第 8 回	日本人から見た外国の暮らし（平野）	米国での事業経験から			
第 9 回		中国・欧州での研究取材から			
第 10 回	日本人から見た外国の暮らし（芦田）	日本国際協力機構（JICA）と国際保健医療学			
第 11 回		日本人研究者が米国などに留学するのはなぜか			
第 12 回	外国人から見た日本の暮らし（エリック）	Introduction to Comparative Culture			
第 13 回		Compartive Culture Workshop			
第 14 回	外国人から見た日本の暮らし（張）	留学生の世界へ			
第 15 回		外国人市民とどう付き合うか			
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					

成績評価の方法と基準 (Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
担当者講義ごとに「授業感想シート」の提出（授業終了10分程度前に記入してもらう）。各教員14点の持ち点とし、計98点、13回以上出席者に2点を加点。	感想文について次の評価とする 講義内容の理解 4 点、論旨の明快さ 4 点、その他（誤字・脱字、適切な句読点、その他評価者独自の加点事項、授業態度、等） 2 点、合計98点（14点×7人）。最後に13回出席者に2点を加点。
テキスト (Textbook)	【書名】 【著者】 【出版社】 【出版年】
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	
備考 (Other Information)	
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	

科目名称 (Course Title)				担当教員(Instructor)	
地域イノベーション (地域企業振興論)				平野 真	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	3 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
この授業では、地域において具体的にどのように産業や地域社会を活性化しあるいは行政も含めてイノベーション（革新、新規ビジネスなど）を起こしていくか、その手法を学び、ワークショップによりスキルを身につけていくことを目的とする。科目授業として学んだマーケティングや企業経営、戦略論などの経営知識、また公共経営の知識をも総動員して、つまり今まで学んできたことの総復習を行いながら、自ら考え創造していく能力を身につける。特に、「地域での」イノベーション創発において、どのようなことに留意すべきかも考えながら、現実に地域で起業したり、地域の特産物を開発したり、地域の観光を活性化したりするための、具体的な手法と知恵を学ぶ。なお授業の進め方や評価手法については、多少の変更を行うことがある。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
1)売れる商品や、人の来る観光地をつくるための考え方を理解する、2) ビジネスにおいて利益を創出するための基本的な考え方を理解する、3) 事業プランを練るための基本技術を習得する、4) 簡単な企画書を書き、多くの人の前で発表することができる					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	オリエンテーション、イノベーションとは？				
第 2 回	アイデアの創出：ドラッカーの指摘するビジネスチャンス				
第 3 回	利益の創出：損益分岐という概念の深い理解				
第 4 回	ブランドの形成：無形資産の経営				
第 5 回	アイデア発表会（学生による提案、個人発表）				
第 6 回	企画書の書き方：押さえておくべきポイント				
第 7 回	事業戦略の考え方：戦略ツールの罫				
第 8 回	人を動かすリーダーシップ：資質論から行動論へ				
第 9 回	組織をどう動かすか：組織運営の目指すもの				
第 10 回	中間テストによる理解確認				
第 11 回	ワークショップのチーム分けとテーマの選択				
第 12 回	参考となるイノベーション事例の紹介				
第 13 回	プレゼンテーション技術について（考え方とノウハウ）				
第 14 回	企画書発表会（チーム発表）				
第 15 回	総復習とまとめ				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
授業時間外に、自分のアイデアをまとめたり、チームでの打ち合わせをしてチーム発表に備えたりしなければならない。そのためには、授業で学んだことを復習し、内容を理解していないと前へ進めない。自ら努力し学習し、チームをもまとめていく主体的な態度、すなわち現実社会で実際に仕事を行っていくための基本的な姿勢を身につけていくことが要求される。					

成績評価の方法と基準 (Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
アイデア発表 (20%) 中間テスト (20%) チーム発表 (20%) 最終テストまたは レポート(40%)	秀：適切に問題点を指摘し、特筆すべき鋭い分析や考察ができ、現実的な解決策を提示できる 優：授業で学習したことを良く理解でき指摘した問題点に対し適切な解決策を提示できる 良：授業で学習した内容を基本的には理解でき、指摘した問題点に対し解決策を提示できる 可：授業内容の理解、問題点の指摘と解決策の提示が、最低限の水準を満たしている 不可：授業の内容が理解できておらず、問題点や解決策の提示ができない、あるいは3分の1を超えて欠席した
	【書名】 【著者】 【出版社】 【出版年】 授業で配布するレジュメを中心に行う。
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	経営能力開発センター編「経営学検定試験公式テキスト1」中央経済社（就職対策として、資格の取得に興味のある人に役立つ。） 基本的には、講義のレジュメの中で、参考文献を紹介する。
備考 (Other Information)	3分の1以上（6回以上）の欠席は、単位不可とする
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	メール連絡 hirano-makoto@fukuchiyama.ac.jp

科目名称 (Course Title)				担当教員 (Instructor)	
地域資源論（地域経済論）				谷口 知弘	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	2 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
20世紀に構築された大量生産、大量消費、大量廃棄型の社会経済システムは、経済成長を成し遂げ物質的な豊かさを生み出す一方、天然資源の枯渇や環境破壊等、地球規模での持続可能性の危機を招きつつある。日本においては先述の危機に加え、少子高齢化や人口減少、東京一極集中、地方と大都市の経済格差、世代間格差など、重大な問題に直面している。 地域資源論では、これらの問題解決のための理論と手法を地域資源を活用した地域づくりに焦点を当てて講究する。持続可能な地域社会を実現するための地域資源の保全や活用について事例を通して学び、その重要性や可能性について理解を深めるとともに、施策や事業を企画する理論と手法を身につける。 尚、授業の進め方として、地域資源の保全・活用の最前線で活躍する方々をゲストに招き、実践者との対話から検討するとともに、先進事例に関する受講者の報告をもとに討論する時間を設けることとする。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
①地域資源を活かした持続可能な地域づくりの理論と手法を理解する。 ②京都府北部地域における地域資源の特性について理解する。 ③地域資源の保全と活用の施策や事業を企画する際に必要な理論と手法を身につける。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	導入：本講義の進め方と地域資源論の全体像 ワークショップ：地域社会の魅力と課題を語ろう				
第 2 回	第 1 部：地域資源を理解するための理論 ①地域資源の分類と地域社会				
第 3 回	②内発的発展論				
第 4 回	③地元学				
第 5 回	第 2 部：地域資源活用の実践と手法 ①文化的資源の活用 1-歴史的資源と観光 (文化的景観、郷土芸能)				
第 6 回	②文化的資源の活用 2-社会的資源と住民自治 (ソーシャル・キャピタル)				
第 7 回	③自然資源の活用 1-地域の自然エネルギー活用				
第 8 回	④自然資源の活用 2-森・里・川・海の つながりを活かした事業				
第 9 回	⑤人的資源の活用-高齢者や主婦の知恵と経験を 活かした事業				
第 10 回	⑥特産的資源の活用-山や海の恵みを 活かした事業				
第 11 回	第3部：先進事例の報告と討論 ①観光・交流				
第 12 回	②福祉・地域づくり				
第 13 回	③移住・雇用促進				
第 14 回	④農・食・アート				
第 15 回	まとめ：埋れし地域資源を社会とつなぐ ワークショップ：活用のアイデアを語ろう				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
①第 1 部、第 2 部は、講義のテーマに関して事前に理論や実践事例、手法などを調べておくこと。 ②第 3 部は、個人またはグループで分担して先進事例の報告を行うため報告の準備をしておくこと。					

成績評価の方法と基準 (Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
クラスへの貢献 (50%) 期末レポート (50%)	秀：適切な課題を設定し、独創的且つ実現性の高い課題解決策を提示できている。 優：適切な課題を設定し、すぐれた課題解決策を提示できている。 良：課題を設定し、一応の課題解決策を提示できている 可：課題設定と解決策の提示が、いずれも最低限の水準を満たしている。 不可：課題設定や解決策の提示が水準に達していない。あるいは3分の1 (6回以上) をこえて授業を欠席した。
テキスト (Textbook)	特になし
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	講義で配布するレジュメで指示する
備 考 (Other Information)	・3分の1以上 (6回以上) の欠席は、単位不可とする
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	連絡先メールアドレス taniguchi@co-design.info

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
地域文化論（北近畿学）				井口 和起	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	1 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要(Course Description)					
北近畿地域、特に福知山を中心に綾部・舞鶴・宮津などの博物館や史跡・施設・街角などを紹介しながら、地域の人々が自覚している文化資源を私たちが学ぶことから学習を始めます。そのために、まずは地域の文化を調べる方法を学び、現地を訪れる前の徹底した事前学習の訓練を行います。そのうえで、実際に諸施設を訪問・見学し、そこでの人との対話を通じて地域の人々の文化への思いを理解し、共感できる感性を育みます。さらに進んで新しい文化の発見につながる文化論の展開へと進む予定です。諸施設見学などは主に自学・自習してもらうことになります。					
授業の到達目標(Course Objectives)					
授業で取り上げた地域の代表的な文化資源の概要を知ること。実際に諸施設を訪問・見学したり、文化的行事に参画し、人びととつながり、交流し、その体験をまとめる能力を持つこと。現場に行く前の徹底した事前調査・事前学習の方法を習得すること。これらを通じて、地域とは何か、文化とは何かという問題に、既成観念から解放されて新たな視点から接近する意欲を持つこと、などを目標とします。					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	ガイダンス：地域文化を発見する「まなざし」				
第 2 回	福知山城博物館 ―城下町：福知山―				
第 3 回	御霊神社と広小路 ―城下町から近代のマチへ―				
第 4 回	「平和公園」に見える福知山の近代文化 ―陸軍のまち―				
第 5 回	福知山生活衣館 ―生活文化・衣服―				
第 6 回	私設「薬の博物館」を訪ねる ―老舗の文化―				
第 7 回	地方新聞から文化を探す ―両丹日日新聞記事から―				
第 8 回	福知山・治水記念館 ―水害とたたかう文化―				
第 9 回	宮津・震災記念館と歌碑 ―北丹後大震災が生んだ歌―				
第 10 回	山椒大夫の世界 ―海と川の文化―				
第 11 回	ゲンゼ資料館 ―綾部・近代製糸業が生んだ文化―				
第 12 回	赤レンガ博物館と引揚記念館 ―海軍のまち・舞鶴―				
第 13 回	地域とは何かを考える ―丹波と丹後と但馬―				
第 14 回	文化とは何かを考える ―内側の思いと外からのまなざし―				
第 15 回	まとめ：地域文化発見をめざす事前学習とは何か				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
授業で毎回指定する予習課題を学習しておくことが望ましいが、困難なこともあるので、復習に重点を置いて学習してほしい。各自が適切な時期・休日などを利用して指定した博物館や史跡・施設を見学すること。その見学報告も兼ねて、授業の進行の中で適宜ノート提出を要求するので、復習として必ずノートを整理しておくこと。					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
授業中の討論への参加 (20%) 提出ノートの内容 (30%) 最終レポート (50%)	秀：徹底した事前調査・学習を踏まえて現地を訪れ、新しい発見の芽をふくむ報告を作製できる。 優：事前調査・学習を踏まえて現地を訪れ、自分の目で見えた文化論を述べる事が出来る。 良：自分がこれまで持ってきた地域文化の既成観念から脱却して、地域の文化資源を新たな視点から探究できる。 可：授業で取り上げた地域の代表的な文化資源の概要を知って、自分の言葉で紹介できる。
テキスト (Textbook)	【書名】 【著者】 【出版社】 【出版年】 特になし。授業時に資料配布。参考資料も紹介。
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	北近畿地域、特に福知山・舞鶴・綾部・宮津の各市史。
備 考 (Other Information)	
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	一覧表参照。

科目名称 (Subject)				担当教員 (Teacher)	
地域防災論				福島 貞道	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	2 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
我が国は、その地理的、地勢的、気候的特性から季節感豊かな潤いのある国土を形成し、古くから自然の恩恵を享受してきた。 一方、そのような立地条件を有するが故に、地震、火山、台風等の自然の脅威に周期的に見舞われるという宿命を負っているのも事実である。このような脅威を社会では自然災害（或いは天災）と称し、人的災害と合わせてこれを防ぐための対策、いわゆる防災対策に取り組んでいるわけである。 この講義では、都市（或いは地域）を人のあらゆる活動の舞台として位置付け、都市政策の基本とすべき「安全・安心の都市づくり」の観点から、災害の要素を概括的に理解したうえで、防災という観点がどこまで意識されているかということ、人災という切り口から学ぶことによって、まちづくりにおける課題と総合的な災害対策の在り方に関する基礎的知識の習得を目指す。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
「都市」、「災害」の基本概念を理解し、災害要素に対する正しい知識と都市における総合的な防災対策に係るハード・ソフト両面からの施策と課題を公共的観点から論じることのできる基礎的知識を習得できる。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	ガイダンス（新たな視点から学ぶ）				
第 2 回	基本認識（1） 都市とは、災害とは				
第 3 回	基本認識（2） 天災と呼ぶもの、人災と呼ぶもの				
第 4 回	自然との共生の意味				
第 5 回	間違っている災害区分				
第 6 回	主な自然現象の形				
第 7 回	防災とは				
第 8 回	自然現象と災害（1）				
第 9 回	自然現象と災害（2）				
第 10 回	自然現象と災害（3）				
第 11 回	過去を知り、歴史に学ぶ				
第 12 回	行政の役割と責務				
第 13 回	防災を切り口としたまちづくり（ハード編）				
第 14 回	防災を切り口としたまちづくり（ソフト編）				
第 15 回	まとめ				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
・ 講義で学んだことを、継続的にかつ反復的に復習すること。 ・ 平素において体感する地域の物理的環境等を意識するように心掛ける。					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
平常点 (15%) レポート (15%) 定期試験 (70%) なお、平常点については、真摯で積極的な授業参加の姿勢への評価であり、毎授業時に提出する「感想文（質問含む）」も参考にする。	秀：都市・災害の基本概念を理解し、ハード・ソフト両面から地域防災について論じることができる知識を有し、的確な問題点の指摘と総合的な観点に基づいた解決法の提案ができる。 優：都市・災害の基本概念を理解し、地域防災に関する問題点の指摘と解決法の提案ができる。 良：都市・災害、地域防災の基本概念が凡そ理解できている。 可：都市・災害、地域防災に関する最低限の理解ができている。 不可：都市・災害・地域防災に関する理解が一定の水準を満たしていない。
テキスト (Textbook)	【書名】 【著者】 【出版社】 ・ 特になし。 授業に際しレジュメを配布する。
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	・ 適宜、紹介する。
備考 (Other Information)	・ 6回以上の欠席者は、定期試験の受験は認めない。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	・ メール等でアポイント

科目名称 (Subject)				担当教員 (Teacher)	
グローバル特別講義Ⅲ（地方行財政）				福島 貞道	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	2 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
地方分権の推進とグローバル化が叫ばれて久しい今、各都市においては、それぞれの地域特性を活かした魅力ある都市形成（まちづくり）への取組が求められている。 真の地方分権下における政策の立案・具現化は、自治体とその都市その地域の住民等との協働による取組が極めて重要となる。この取組によるまちづくりは、各都市のアイデンティティの確立と魅力を向上させるとともに、ひいては観光立国を標榜する日本国の奥行の深い多様な魅力の創造と発信に寄与することとなる。 この講義では、「景観」というキーワードを絡めながら都市を私達のあらゆる活動の舞台として位置付け、その都市、その地域の特性を活かしたまちづくりの実現のための手法と制度・仕組を国の法制度との関わりの中で学び、広い視野と公共的観点から地方行政の在り方とその責務について論じることができる感性と制度運用等の基礎的能力の習得を目指す。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
「行政」、「景観」、「都市」の基本概念を理解し、それぞれの都市、地域における課題の収集と分析、解決のための基礎的能力を身に付け、受講者自らが、公共的感性の下に地方行政に参画するための基本的な知識と制度・仕組の概念を習得し、自律的活動ができる職能人となることができる。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	ガイダンス及び公共政策としてまちづくりを学ぶ意義				
第 2 回	行政とは				
第 3 回	日本の風土、伝統、文化（まちづくりに対する基本的感性の源）				
第 4 回	景観という切り口（１） 風景の概念				
第 5 回	景観という切り口（２） 景観その意味するもの（景観の概念）				
第 6 回	魅力ある都市の形成（１） 景観から考えるまちづくり				
第 7 回	魅力ある都市の形成（２） 都市の役割と構成				
第 8 回	公共政策としての都市形成（１）（安全・安心と伝統・文化の継承）				
第 9 回	公共政策としての都市形成（２）（安全・安心と伝統・文化の継承）				
第 10 回	まちづくりに関わる法の体系と構成（１） 法制度の基本と主な関係法令				
第 11 回	まちづくりに関わる法の体系と構成（２） 地方分権型の法体系				
第 12 回	まちなみ保存政策の意義と手法				
第 13 回	住民主体のまちづくりのための制度・仕組				
第 14 回	行政の役割と責務（地方行政の要諦）				
第 15 回	まとめ				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
・ 講義で学んだことを、継続的にかつ反復的に復習すること。 ・ 平素において体感するすべての現象を意識して観るよう心掛けること。					

成績評価の方法と基準(Grading)		
評価方法 (割合)	評価基準	
平常点 (15%) レポート (15%) 定期試験 (70%) なお、平常点については、真摯で積極的な授業参加の姿勢等への評価であり、毎授業時に提出する「感想文（講義に関する質問を含む）」も参考にする。	・秀：行政、景観、都市の基本概念を理解し、公共的観点からまちづくりを論じることができる知識、技量を有し、的確な問題点の指摘と、その解決のための法の制度・仕組を提案することができる。 ・優：行政、景観、都市の基本概念及び公共的観点からまちづくりを考える意義を理解し、問題点の指摘とその解決のための手法を提示することができる。 ・良：行政、景観、都市の基本概念が凡そ理解できており、まちづくりに関する問題点の指摘とその公共的観点からの一応の解決策を提示できる。 ・可：行政、景観、都市の基本概念及びまちづくりに対する公共的観点からの問題点の把握と解決策の必要性について、最低限の理解ができている。 ・不可：行政、景観、都市の基本概念、まちづくりに関する基本的な理解等がいずれも最低限の水準を満たしていない。	
テキスト (Textbook)	【書名】	【著者】
	【出版社】	【出版年】
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	・特になし。 授業に際しレジュメを配布する。 ・適宜、紹介する。	
備考 (Other Information)	・6回以上の欠席者は、定期試験の受験は認めない。	
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	・メール等でアポイント	

科目名称 (Course Title)				担当教員(Instructor)	
中小企業論				佐藤 充	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	3 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
中小企業は、日本経済を支える基盤であるとともに、地域経済を牽引するものである。我が国では、大企業の下請企業や地域商業の小売・サービス店だけではなく、高度な技術力や独創的なビジネスモデルを有する革新的中小企業が事業活動を展開している。さらに、新たな産業の担い手として、スタートアップ企業への期待も高まっているのである。 本講義は、中小企業概念や仕組みを学習するとともに、中小企業の実態や経営課題について、具体的なデータや事例を通して理解することを目的とする。あわせて、地域経済における中小企業の役割や問題点を議論・検討するものである。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
① 日本経済における中小企業の役割を理解し、中小企業を取り巻く経済環境や中小企業の経営について説明することができるようになる。 ② 中小企業が抱える諸問題を把握し、具体的な根拠に基づき、今後の在り方に関する展望や構想を提示することができるようになる。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	イントロダクション 日本経済と中小企業				
第 2 回	中小企業とは				
第 3 回	日本における中小企業の変遷				
第 4 回	大企業と中小企業				
第 5 回	下請システムと中小企業				
第 6 回	グローバル化と中小企業				
第 7 回	中小企業の事業承継				
第 8 回	中小企業の研究開発活動とイノベーション				
第 9 回	スタートアップ企業の経営と支援				
第 10 回	中小企業と地域経済				
第 11 回	中小企業のネットワーク化				
第 12 回	情報化と中小企業				
第 13 回	中小企業の資金調達				
第 14 回	中小企業政策の展開				
第 15 回	全体のまとめ				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
① 各講義の最後に、次回までの小課題と予習の範囲を指示する。 ② 講義前には、小課題に取り組むとともに、教科書の指定された範囲を読むこと。 ③ 講義後は、配布資料とノートを読んで復習すること。 ④ ニュースや新聞記事等に目を通し、中小企業に関する時事問題について、自らの意見を考えること。					

成績評価の方法と基準 (Grading)		
評価方法	(割合)	評価基準
期末試験	(60%)	秀：概念やフレームワークを適切に用いて、事象の問題点を、論理的かつ客観的に説明でき、すぐれた解決策を提示できる。 優：概念やフレームワークを適切に用いて、事象の問題点を、論理的かつ客観的に説明でき、解決策を提示できる。 良：概念やフレームワークを用いて、事象の問題点についておおよその説明ができ、一応の解決策を提示できる。 可：概念やフレームワークを理解し、事象の問題点について最低限の説明ができる。 不可：概念やフレームワークを用いて、事象の問題点を説明できていない。
小課題	(30%)	
講義での発言	(10%)	
テキスト (Textbook)		【書名】 中小企業・ベンチャー企業論【新版】 【著者】 植田浩史ほか 【出版社】 有斐閣コンパクト 【出版年】 2014年
参考書・資料等 (Supplementary Reading)		各講義のなかで、適宜、参考文献を提示する。
備 考 (Other Information)		講義に3分の2以上出席しなければ定期試験は受験できません。 講義中は、できるだけ、積極的な発言を求めます。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)		配布するレジュメに記載された連絡先に連絡すること。

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
統計学				三品 勉	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	2 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
現代社会では数字に取り巻かれて生活している。数をより分かり易く理解し、説得力のある説明をするための手段の一つが統計学である。身の回りの数字を読み取り、意思決定に結びつける基礎的方法を学ぶ。数値データのまとめ方や客観的な活用技術は、これから学ぶ専門科目の理解、さらに社会に出てから必要なものとなる。不確実性を含むデータを一定の確実さをもつ情報に加工し、目的に応じて適切に扱う方法を説明する。本講義は文系学生のための統計学入門として位置づけており、単に手法を覚えるだけでなく、その背景となる考え方を中心に学ぶ。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
記述統計と推測統計の違いを理解し、必要に応じて適切にデータを処理することができる。平均値と分散といった数値の扱いができる。離散的・連続的確率分布を理解し、その関係を説明することができる。仮説検定の考え方を説明することができる。相関係数と回帰式を求めることができる。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	オリエンテーション データの整理とグラフによる表現				
第 2 回	平均値と中央値 クロス集計 ヒストグラム				
第 3 回	集合と確率				
第 4 回	データのバラツキ				
第 5 回	確率分布				
第 6 回	正規分布				
第 7 回	無作為抽出と標本分布				
第 8 回	中間テスト、解説				
第 9 回	点推定と区間推定				
第 10 回	仮説と検定				
第 11 回	相関と線形回帰				
第 12 回	因子分析				
第 13 回	クラスター分析				
第 14 回	電卓を使った統計処理				
第 15 回	総まとめ、期末テスト				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
前回学習した部分をよく復習しておくこと。新しい用語・考え方が多く出てくるが、理解の積み重ねが必要なので、不明な点は次回の授業までになくしておくこと。統計学が様々な分野で使われていることを日常生活で確認してほしい。					

成績評価の方法と基準(Grading)		
評価方法	(割合)	評価基準
授業内試験 授業参加	(90 %) (10 %)	中間テストと期末テスト 議論・質問・コメントによる授業への参加回数
テキスト (Textbook)		【書名】 統計学への招待(近く刊行予定) 【著者】 日本経営数学会 【出版社】 税務経理協会 【出版年】 2017
参考書・資料等 (Supplementary Reading)		必要に応じて指示する
備考 (Other Information)		特になし
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)		Eメール

科目名称 (Course Title)				担当教員(Instructor)	
農業経営論（農林業・農村振興論）				塩見 直紀	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	3 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
この授業は、日本における農業経営の現状と動向、農業経営における手法、戦略等を先進例、若手農業系ベンチャー、新しい潮流に学んでいく。地域資源活用、新しい組み合わせ、コンセプトメイク、ブランディング、情報発信等なども重要なキーワードとして、一般の企業経営においても応用可能な内容とし、考え方や方法の理解が深まるように事例紹介も含め講述する。最終日には、自らが農業系ベンチャーを企画するをテーマにプレゼンをおこなう。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
・ 農業や農業経営の現状と課題について基本的な知識を修得する。 ・ 経営センス、農業経営の在り方、戦略等を学ぶ。 ・ 地域資源（地域資源創出）を活かした農業経営独自戦略プランを立案できる。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	農業経営論の概要とめざす方向性について（オリエンテーション）				
第 2 回	若手農業ベンチャーに学ぶ農業経営、可能性、そして未来（1）日本事例				
第 3 回	若手農業ベンチャーに学ぶ農業経営、可能性、そして未来（2）京都府内事例				
第 4 回	若手農業ベンチャーに学ぶ農業経営、可能性、そして未来（3）北近畿事例				
第 5 回	農業経営の動向と現状(1)				
第 6 回	農業経営の動向と現状(2)				
第 7 回	農業経営の動向と現状(3)				
第 8 回	農業ベンチャーワークショップ（個別プレゼンテーション準備）				
第 9 回	先進的農業経営の事例(1)：家族経営				
第 10 回	先進的農業経営の事例(2)：I T×農業				
第 11 回	先進的農業経営の事例(3)：企業の農業参入				
第 12 回	次世代農業経営の展望（1） オーガニックトレンド（環境時代対応）				
第 13 回	次世代農業経営の展望（2） C S A（地域との関係性）				
第 14 回	次世代農業経営の展望（3）エネルギー兼業（組み合わせ戦略）				
第 15 回	個別プレゼンテーション（農業ベンチャー構想）				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
・ 農業のあり方や農業系ベンチャー等の存在について、日ごろから問題意識をもつこと。 ・ 農業系ベンチャーを自分も立ち上げるという気概をもち、関連書を手にするなど、自己学習をおこなうこと。					

成績評価の方法と基準 (Grading)	
評価方法 (割合) 期末試験 (60%) 毎回の感想・気づき・提案シート (20%) 個別最終プレゼン (20%)	評価基準 秀：必要なキーワードを過不足なく用いて、論理的に客観的な説明ができ、かつ、課題や独自の解決策を的確に指摘できている 優：キーワードを用いながら論理的に客観的な説明ができ、課題を理解し、解決策を提示できる 良：おおよその説明はできており、かつ、課題を理解している 可：課題の説明において、最低限の水準を満たしている 不可：課題が説明できていない
テキスト (Textbook)	【書名】 【著者】 【出版社】 【出版年】
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	毎講義のレジュメの中で、適宜、参考文献を紹介する
備考 (Other Information)	3分の1以上 (6回以上) の欠席は、単位不可とする。※1回目の授業も5回の欠席に含むので注意
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	毎週1回、オフィスアワーとする。具体的な曜日・時限については、オフィス前に提示しておく。メールでも遠慮なく、連絡してください (conceptforx@gmail.com)

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
プログラミング I				神谷 達夫	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	1 年次	講義	有 (15名)	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要(Course Description)					
この講義は、プログラミングの基礎を習得することを目的としている。プログラミングは、コンピュータに対して動作を指示するためのプログラムを作成する行為である。 本講義で取り扱う言語はPythonである。このプログラミング言語は、近年用いられることが多く、習得することによって研究データ等の処理に役立つと思われる。 この講義では、初めてプログラミングを経験する者を対象に、Pythonを用いて簡単なプログラムが作成できるようになることを目指している。前半でPythonの基本的な文法を解説し、後半はデータ処理に必要な事項とプログラムのデバッグに必要な知識を取り扱う。					
授業の到達目標(Course Objectives)					
プログラミング言語Pythonの基礎を習得し、自分で簡単なプログラムを作ることができるようになる。					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	オリエンテーション		講義の進め方と講義の概要説明		
第 2 回	動作環境の構築		Pythonインタプリタの動作確認		
第 3 回	変数とデータ構造		リテラル、変数宣言、リスト、辞書		
第 4 回	ファイルからの実行		エディタの操作、Pythonスクリプトの作り方		
第 5 回	制御構造の基本		繰り返しと条件分岐		
第 6 回	制御構造を使ったプログラミングの練習				
第 7 回	モジュールの利用		モジュールの読み込み、pipコマンド		
第 8 回	日本語の取り扱い		文字コードの種類、エンコードとデコード		
第 9 回	ファイル操作		ファイルのオープン、読み込み、書き込み		
第 10 回	データの読み込み		CSVファイル、TSVファイルの操作		
第 11 回	フィルタとパイプライン		フィルタプログラムの作成		
第 12 回	エラーとトレースバック		トレースバックを使ったデバッグ		
第 13 回	デバッグの使用方法		pdbデバッグの使い方		
第 14 回	テストとアサーション		プログラムのテスト方法		
第 15 回	まとめ				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
プログラミングできるようになるには、授業以外でもプログラムを作成することが重要である。帰宅してからでもプログラムが作成できるような環境を用意し、自分で作ったプログラムを実行することが理解への近道である。					

成績評価の方法と基準(Grading)		
評価方法	(割合)	評価基準
期末試験 レポート・課題提出	(60%) (40%)	秀：講義で扱ったプログラミングの知識とその応用方法を論理的に説明でき、その知識を応用できる 優：講義で扱ったプログラミングの知識とその応用方法を論理的に説明できる 良：おおよその説明はできており、かつ、簡単なプログラムは作ることができる
テキスト (Textbook)		【書名】 10日でおぼえるPython入門 【著者】 穂刈実紀夫 他 【出版社】 翔泳社 【出版年】 2009年
参考書・資料等 (Supplementary Reading)		講義中に参考文献を紹介する
備考 (Other Information)		3分の1以上（6回以上）の欠席は、単位不可とする
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)		電子メールによる

科目名称 (Course Title)				担当教員(Instructor)	
簿記論 I				吉田 周邦	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	1 年次	講義	無	科目等履修
授業の概要 (Course Description)					
日商簿記 3 級程度の初級レベルの簿記会計学をテキストに従って講義する。 授業計画にそって授業を進め、あらかじめ受講者に次回テーマに関する情報収集や論点につき課題を与え、授業においては、講述だけでなく演習と双方向の活発なディスカッションを志向する。課題として出題されるテキストやワークブックの問題を自ら解くことが、大変重要で理解につながる。また、適宜課題レポートの提出・発表を求め、中間考査・期末試験を実施する。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
個人事業主を前提として、簿記論の前提となる貸借原理・帳簿組織の基礎知識を習得し、簿記一巡の流れを理解する。また、仕訳による基本的な個々の会計処理を習得し、簡易な財務諸表が作成できる。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	ガイダンスと、会計学における簿記論の重要性・グローバルなビジネス共通言語としての簿記				
第 2 回	複式簿記の基本概念				
第 3 回	取引と仕訳				
第 4 回	簿記一巡の流れと財務諸表				
第 5 回	現金預金取引				
第 6 回	棚卸資産（商品）売買取引(1)（売上収益認識）				
第 7 回	棚卸資産（商品）売買取引(2)（棚卸資産の記録と売上原価算定）				
第 8 回	前半の総括・中間考査				
第 9 回	債権・債務取引				
第 10 回	手形取引(1)				
第 11 回	手形取引(2)				
第 12 回	有価証券取引				
第 13 回	固定資産取引（有形固定資産と減価償却・無形固定資産）				
第 14 回	精算表・決算・財務諸表作成				
第 15 回	全体の総括・期末試験				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
次回の講義に関するテキストの例題・ワークブックの練習問題を、課題として必ず自ら解くこと。実際に問題を解くことが、理解と上達につながる。					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
中間考査・期末試験 (60点) 課題レポート提出・発表 (40点) TOTAL (100点) 中間考査・期末試験の合計が 50 点未満 (100点満点) の場合、単位を付与しない。また4回以上欠席の場合、単位を付与しない。	秀：100点 - 90点 優：89点 - 80点 良：79点 - 70点 可：69点 - 60点 不可：59点 - 0点
テキスト (Textbook)	【書名】 新検定簿記講義3級商業簿記 【著者】 渡部裕亘、片山覚、北村敬子 【出版社】 中央経済社 【出版年】 2017年
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	渡部裕亘、片山覚、北村敬子「新検定簿記ワークブック 3 級商業簿記」中央経済社
備 考 (Other Information)	講義及び試験には、電卓を携行すること。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	メールによる予約。

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
保健体育（体育理論/身体運動の科学）				芦田 信之	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	2 年次	講義	無	科目等履修・聴講
授業の概要(Course Description)					
人が成長する過程において、知育・徳育・体育・食育があり、そのうち体育は運動を通じて人格形成・成長の教育の場であった。運動を通じた体づくりは、そのライフステージにおいて、それぞれ、学校教育、社会人の生涯スポーツ、高齢者の健康維持に必要な生活習慣である。学校教育において体育は講義科目としての保健体育と実技としての各種スポーツの実施が組み込まれている。本講義は健康増進を目指して運動をおこなうにあたり、身体の仕組みと機能をまなび、運動習慣の形成を促すものである。また、競技スポーツを自然科学の視点からとらえ、スポーツ生理学、スポーツ物理学、用具の科学等を学ぶことによって、日常生活に運動を取り入れるための理論を学ぶ					
授業の到達目標(Course Objectives)					
身体の構造と機能についての知識を身につける。日常生活に運動を取り入れ、運動習慣を身につける。					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	授業ガイダンス 健康増進の生活スタイル				
第 2 回	運動習慣と生活習慣病予防				
第 3 回	骨・筋肉構造と機能 エネルギー補給				
第 4 回	間違いだらけの健康情報				
第 5 回	栄養とスポーツ				
第 6 回	身体能力 活動度測定 バイタルサイン				
第 7 回	子供の体力・運動能力				
第 8 回	加齢と運動				
第 9 回	脳と運動 随意運動 不随意運動				
第 10 回	ストレスと運動 自律神経、ホルモン調節				
第 11 回	運動トレーニング バイオメカニクス				
第 12 回	スポーツの中の科学 ルールと記録				
第 13 回	スポーツの中の科学 運動と物理学				
第 14 回	スポーツの中の科学 ゲームの数理科学 強さの指標				
第 15 回	生涯スポーツ				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
授業計画に書かれている各回のテーマを確認し、必要な予習・復習をすること					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
期末試験 (60 %) 毎講義の確認テスト (40 %)	秀：要求された程度を超えて優秀な成績。基準点として90～100点 優：要求にふさわしく優れた成績。基準点として80～89点 良：要求をみたす成績 基準点として70～79点 可：単位取得を認める合格最低ライン。 基準点として60～69点 不可：合格最低ラインに達しない成績。 基準点として59点以下
テキスト (Textbook)	【書名】 これからの健康とスポーツの科学 第4版 【著者】 阿部孝・琉子友男 【出版社】 講談社 【出版年】
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	
備 考 (Other Information)	毎回、前回の内容の小テストをおこなう。3分の1以上（6回以上）の欠席は単位不可とする。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	講義終了時またはメールにて質問や相談日時を受け付ける。メールアドレス：ashida-nobuyuki@fukuchiyama.ac.jp

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
マーケティング（マーケティング論）				加藤 好雄	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	3 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要(Course Description)					
参考文献の序文では、「現在ではマーケティングは限られた業務を担った企業の1 部門ではなく、全社をあげた事業活動である。マーケティングが企業のミッション、ビジョン、戦略策定を主導する。企業の全部門が目標達成のために協力して初めてマーケティングは成功するのである。」とある。このように、マーケティングは企業活動に不可欠であるが、先進的な自治体においてもマーケティングの基礎概念を取り入れた事業が行われてきている。授業で習得したマーケティングの概念や知識は、専門研究での調査・分析や就職した様々な業種の企業で役立つことになる。 本講義では、マーケティングで重要なSTP、マーケティング・ミックス（製品戦略・価格戦略・流通戦略・プロモーション戦略）、そして、ブランド戦略を体系的に学び、さらに、消費者行動論やマーケティング・リサーチの基礎的な概念・知識を学ぶことでマーケティングへの理解を深める。					
授業の到達目標(Course Objectives)					
本講義では、以下の4 点の知識・能力を習得することを目的とする。 ①マーケティングの概念・用語・知識を体系的に理解している。 ②消費者行動論の基礎的な概念を理解している。 ③調査の基礎的な手法の知識を理解している。 ④マーケティング戦略を、適切な用語を用いて説明することができる。					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	ガイダンス+マーケティングの基礎概念				
第 2 回	ケース・スタディ① マーケティング戦略の事例研究 I				
第 3 回	STP ①（セグメンテーションとターゲティング）				
第 4 回	〃 ②（ポジショニング）				
第 5 回	マーケティング・ミックス①（製品戦略）				
第 6 回	〃 ②（価格戦略）				
第 7 回	〃 ③（流通戦略）				
第 8 回	〃 ④（プロモーション戦略）				
第 9 回	ケース・スタディ② マーケティング戦略の事例研究 II				
第 10 回	ブランド戦略				
第 11 回	消費者行動論（消費者行動とマーケティング）				
第 12 回	マーケティング・リサーチ①（基礎）				
第 13 回	〃 ②（応用）				
第 14 回	ケース・スタディ③ マーケティング戦略の事例研究 III				
第 15 回	まとめ				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
基礎概念・用語・知識は講義によって学ぶが、理解を深めるためにマーケティング戦略の事例研究としてケース・スタディを行う。このため指定した事例を予習をしておくこと。また、小テストと期末試験を行うので、テキストや講義時に配布した資料の復習は必ず行うこと。					

成績評価の方法と基準(Grading)		
評価方法	(割合)	評価基準
期末試験 小テスト 2回	(60%) (40%)	秀：「授業の到達目標」を非常に高いレベルで満たしている。 優：「授業の到達目標」を高いレベルで満たしている。 良：「授業の到達目標」を十分に満たしている。 可：「授業の到達目標」を満たしている。 不可：「授業の到達目標」を満たしていない。
テキスト (Textbook)		【書 名】 ケースに学ぶマーケティング 【著 者】 青木幸弘[編] 【出版社】 有斐閣ブックス 【出版年】 2015年
参考書・資料等 (Supplementary Reading)		【書 名】 コトラー & ケラーのマーケティング・マネジメント 第12版 【著 者】 フィリップ・コトラー、ケビン・レーン・ケラー 【出版社】 ピアソン・エデュケーション【出版年】 2008年
備 考 (Other Information)		他の経営学の関連科目の履修をすることが望ましい。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)		第1回目の講義で説明する。

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
流通システム論（小売サービス業論）				佐藤 充	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	2 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要(Course Description)					
我々の生活は、多様なモノやサービスを購入することで成立する。これらの消費活動は、生産者から消費者までを結ぶ流通システムによって支えられている。現代社会において、流通システムを構成する卸売業や小売業は不可欠なものである。そして、日常生活に直結するものであることから、我々が暮らす地域の動向をも左右することとなっている。 本講義は、基本的な流通システムの仕組みや役割を学習するとともに、卸売業と小売業の事業形態やその実態について、具体的なデータや事例を通して理解することを目的とする。あわせて、地域における流通システムや商業空間の意義や問題点を議論・検討するものである。					
授業の到達目標(Course Objectives)					
① 流通システムの全体像を理解し、卸売業や小売業の仕組みや役割を説明することができるようになる。 ② 卸売業や小売業が直面する問題を把握し、具体的な根拠に基づき、今後の在り方に関する展望や構想を提示することができるようになる。					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	イントロダクション 流通システムと卸小売業について				
第 2 回	流通システムの仕組みと現状				
第 3 回	小売業の事業形態と機能				
第 4 回	小売業の発展プロセスとその理論				
第 5 回	我が国における小売業の成り立ちとその展開				
第 6 回	小売業態の動向と現況				
第 7 回	卸売業の事業形態と機能				
第 8 回	卸売業の発展プロセス				
第 9 回	卸売業の動向と減容				
第 10 回	マーケティングチャンネルと流通系列化				
第 11 回	流通システムと情報化				
第 12 回	流通システムと国際化				
第 13 回	商店街とまちづくり				
第 14 回	我が国における流通政策の変遷				
第 15 回	全体のまとめ				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
① 各講義の最後に、次回までの小課題と予習の範囲を指示する。 ② 講義前には、小課題に取り組むとともに、教科書の指定された範囲を読むこと。 ③ 講義後は、配布資料とノートを読んで復習すること。 ④ ニュースや新聞記事等に目を通し、流通システムに関する時事問題について、自らの意見を考えること。					

成績評価の方法と基準 (Grading)		
評価方法	(割合)	評価基準
期末試験	(60%)	秀：概念やフレームワークを適切に用いて、事象の問題点を、論理的かつ客観的に説明でき、すぐれた解決策を提示できる。 優：概念やフレームワークを適切に用いて、事象の問題点を、論理的かつ客観的に説明でき、解決策を提示できる。 良：概念やフレームワークを用いて、事象の問題点についておおよその説明ができ、一応の解決策を提示できる。 可：概念やフレームワークを理解し、事象の問題点について最低限の説明ができる。 不可：概念やフレームワークを用いて、事象の問題点を説明できていない。
小課題	(30%)	
講義での発言	(10%)	
テキスト (Textbook)		【書名】 新版 ベーシック 流通と商業 - 現実から学ぶ理論と仕組み - 原田英生・向山雅夫・渡辺達朗 【著者】 【出版社】 有斐閣アルマ 【出版年】 2010年
参考書・資料等 (Supplementary Reading)		各講義のなかで、適宜、参考文献を提示する。
備 考 (Other Information)		講義に3分の2以上出席しなければ定期試験は受験できません。 講義中は、できるだけ、積極的な発言を求めます。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)		配布するレジュメに記載された連絡先に連絡すること。

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
歴史学（歴史と地理）				井口 和起	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	1 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
「歴史とは何か」を一般的・抽象的に議論はしません。今回は2015年8月に日本の首相が国の内外に向けて発表した「戦後70年首相談話」を素材に、日本の近現代史を振り返る作業をとおして、歴史を研究する歴史学の基本的な考え方と史実の認識の仕方について、みなさんと共に検討していきます。また、この首相談話は国際的にも注目されましたが、日本の政治家たちの歴史にかかわる発言や行動が時に外交問題になったりします。なぜ、このようなことが起こるのかについて知ること現代の歴史を語るうえでは無視できません。このいわゆる「歴史認識問題」についても、歴史学の基本的な考え方の視点から論じます。これらを語りあった後にまとめとして、歴史的なものの考え方の基本について確認しようと思います。 なお、15回の授業計画は受講生の数や討論の進行状況で若干の変更を行うこともあります。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
日本近現代史上の基本的な出来事について、歴史学の方法で史実として明らかにする方法を自分の考え方で確認できること。そのうえで、歴史学の考え方を基礎に「歴史認識問題」についても多面的な視点から自分の考えをまとめる能力を持つこと。そして現代世界を過去・現在・未来へつなげる歴史過程として把握できる歴史的思考に習熟すること。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	ガイダンス：歴史学と現代日本 ―歴史と政治―				
第 2 回	戦後70年首相談話と歴史学				
第 3 回	19世紀半ば日本が直面した国際システムの特徴は？				
第 4 回	日本はどんな立憲国家を創ったか？				
第 5 回	日本はどのようにして独立を維持したか？				
第 6 回	日露戦争はアジアの人々を勇気づけたか？				
第 7 回	第一次世界大戦と世界史の転換				
第 8 回	十五年戦争への道 ―「国内政治システム」が「歯止め」にならなかったのは何故か？―				
第 9 回	戦争とアジアの人びと ―植民地・占領地・戦場―				
第 10 回	「歴史認識問題」とは何か？				
第 11 回	「歴史認識問題」と国際理解				
第 12 回	歴史的な考え方 1 ―「轻信」・「偏見」・「単純な証拠主義」は禁物―				
第 13 回	歴史的な考え方 2 ―プロポーション（調和）―				
第 14 回	歴史的な考え方 3 ―パースペクティブ（遠近法）―				
第 15 回	まとめ ―歴史意識・歴史認識・歴史観―				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
授業で毎回指定する予習課題を学習しておくこと。 また、高等学校で日本史を学習した人は教科書の近現代史部分を復習しておくこと。高等学校で日本史を学習しなかった人は中学校時代の教科書を復習しておくこと。上記のどちらの教科書も持っていない人は類似の学習参考書などを参考に復習しておくこと。 授業の進行の中で適宜ノート提出を要求するので、復習として必ずノートを整理しておくこと。					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
授業中の討論への参加 (20%) 提出ノートの内容 (30%) 最終レポート (50%)	秀：現代世界を過去・現在・未来へつながる歴史過程として適切な例を引いて説明できる。 優：日本近現代史上の重要な出来事について自分の認識とその根拠を説明できる。 良：自分がこれまで持ってきた歴史的事件についての認識を再検討する作業を行った。 可：授業の概要をほぼ理解できている。
テキスト (Textbook)	【書名】 なし。 【出版社】 【出版年】 特になし。授業時に資料配布。
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	岩波新書『シリーズ：日本近現代史』全10巻（2009年完結） 東郷和彦・波多野澄雄編『歴史問題ハンドブック』（岩波現代全書、2015年刊） 木村幹『日韓歴史認識問題とは何か』（ミネルヴァ書房、2014年刊）
備 考 (Other Information)	
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	一覧表参照。

科目名称 (Course Title)				担当教員 (Instructor)	
観光まちづくり論 (地域観光論 / 観光ビジネス論)				谷口 知弘	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	3 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
地域社会は、少子高齢化や過疎化、ソーシャル・キャピタルの減退などによる住民自治機能の低下によって、従来担ってきた防災や教育、福祉、文化の継承など、様々な「まちづくり」活動の停滞や破綻の危機に直面している。 本講義「観光まちづくり論」では、これらの地域社会の問題解決の糸口を「観光」の視点を活かした「まちづくり」に求め、その理論と手法を実践の系譜と展開から講究する。 尚、授業の進め方として、観光まちづくりの最前線で活躍するキーパーソンをゲストに招き、実践者との対話から検討するとともに、先進事例に関する受講者の報告をもとに討論する時間を設けることとする。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
①「観光」視点から取り組む持続可能なまちづくりの理論と手法を理解する。 ②京都府北部地域における観光まちづくりの現状を把握し、課題と展望を議論することができる。 ③地域資源を活用した観光まちづくりの新たな事業提案ができる。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	導入：本講義の進の目的とプロセス ワークショップ「『観光』とは？自身の経験から考えよう」				
第 2 回	第1部 「観光まちづくり」とは ①まちづくりの系譜と展開				
第 3 回	②観光まちづくりの系譜と展開				
第 4 回	③理解を深めるワークショップ「観光×まちづくりの魅力と課題」				
第 5 回	第2部 地域社会の課題と観光まちづくり ①教育・文化と観光まちづくり				
第 6 回	②農業と観光まちづくり				
第 7 回	③健康と観光まちづくり				
第 8 回	④住民自治と観光まちづくり				
第 9 回	⑤理解を深めるワークショップ「地域社会の課題と観光まちづくりを考える」				
第 10 回	第3部 北近畿における観光まちづくりの取り組み ①行政施策と観光まちづくり～福知山市の観光政策とまちづくり				
第 11 回	②産学公民協働の観光まちづくり～プラットフォームとしての「海の京都」				
第 12 回	③市民活動と観光まちづくり～手づくり市による地域活性化				
第 13 回	④企業活動と観光まちづくり～ゲストハウスを起点とした地域活性化				
第 14 回	⑤理解を深めるワークショップ「北近畿の地域資源を活用した観光まちづくり」				
第 15 回	まとめのワークショップ「観光まちづくりの課題と展望を語ろう」				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
予習：各回のテーマについて、文献やインターネットによる調査、自身の関心を整理するなどあらかじめ学習しておくこと。 復習：講義で得た気づきや成果をレポートにまとめること。					

成績評価の方法と基準 (Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
クラスへの貢献 (50%) 期末レポート (50%)	秀：適切な課題を設定し、独創的且つ実現性の高い課題解決策を提示できている。 優：適切な課題を設定し、すぐれた課題解決策を提示できている。 良：課題を設定し、一応の課題解決策を提示できている 可：課題設定と解決策の提示が、いずれも最低限の水準を満たしている。 不可：課題設定や解決策の提示が水準に達していない。あるいは3分の1 (6回以上) をこえて授業を欠席した。
テキスト (Textbook)	特になし
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	講義で配布するレジュメで指示する
備 考 (Other Information)	3分の1以上 (6回以上) の欠席は、単位不可とする
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	連絡先メールアドレス taniguchi@co-design.info

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
行政学				富野 暉一郎	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	2 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要(Course Description)					
この講義は行政学の入門編です。現代の社会では、行政は私たちの生活の隅々まで浸透し、行政のあり方が私たちの人生に深い影響を与えています。行政は社会の中でどのような役割を持っているのか、その仕組みはどのようになっているのか、私たちの生活と行政はどのように関係しているのか、そして、私たちは主権者として行政にどのように関わっていくことが必要なのか、などをこの講義で考察していきたいと思います。 講義では、実際に社会で起きている現象や事件などを、行政の視点から分析するほか、身近な行政である市役所を対象に、公務職員などとの対話も取り込んでいきます。 また、身近な行政である市役所を対象に、その業務を学び、職員等との対話を行います。					
①行政とは何か、について基礎的な知識を得る。 ②日本の行政の仕組みについて、基礎的な理解ができる。 ③国と地方自治体との関係を理解する。 ④地方自治の役割と課題について知る。					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	イントロダクション（市役所の中で何が・・・映像資料） この講義で学ぶこと				
第 2 回	三権分立、政治と行政、				
第 3 回	議院内閣制の行政と二代表制の行政				
第 4 回	行政の仕組みI 国と地方自治体 地方自治の国際比較				
第 5 回	行政の仕組みII 行政の組織、官僚制度				
第 6 回	行政の仕組みIII 財政の仕組み				
第 7 回	行政と政策と計画と				
第 8 回	地方分権				
第 9 回	住民参加と協働型社会				
第 10 回	グループ討議I				
第 11 回	市議会との対話				
第 12 回	市役所との対話				
第 13 回	グループ討議II				
第 14 回	現代行政の課題				
第 15 回	マルチパートナーシップ型社会				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
①次回の講義で学ぶテーマについて、指定された文献・資料等を読み込んでおくことを求めます。 （レポート提出を求めることがある） ②グループ討議及び市議会等との対話については、グループで役割分担を決めて事前学習をしてもらいます。					

成績評価の方法と基準(Grading)		
評価方法	(割合)	評価基準
期末試験 レポート (3回) ミニツツペーパー	(60%) (30%) (10%)	期末試験とレポートについては、①論点が明確に捉えられているか ②講義の内容に即しているか、③論旨に一貫性があるか、の3点について5段階で評価します。また自主的な学習の成果を盛り込んでいると認められるものについては、期末試験で10点以内、レポートで合計5点以内を加点します。
テキスト (Textbook)		【書名】 【著者】 【出版社】 【出版年】
参考書・資料等 (Supplementary Reading)		村松岐夫 『行政学教科書』 有斐閣 2011年 大森 彌 『自治体行政学入門』 良書普及会 2000年
備考 (Other Information)		
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)		初回の講義で連絡方法を指示します。

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
グリーンツーリズム論				中尾 誠二	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	3 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
日本における「グリーンツーリズム政策」について、その理念や背景について詳しく考察する。さらに、農林漁家民宿・農林水産物直売所・農山漁村レストラン・道の駅といった「グリーンツーリズム施設」や日本型ワーキングホリデー等「ソフト事業」の現状と課題を明らかにし、2003年以降に全国適用された旅館業法等の規制緩和によってもたらされた「農山漁村民泊」の新たな動き等を踏まえ、今後の展望を行う。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
「地域経営」の視点から、グリーンツーリズムによる農山漁村振興の概要・各論を学び、政策的問題解決の基本的な考え方を身につける。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	グリーンツーリズム・グリーンライフ・エコツーリズム (1)				
第 2 回	グリーンツーリズム・グリーンライフ・エコツーリズム (2)				
第 3 回	農林漁業・農山漁村の魅力と多面的機能 (1)				
第 4 回	農林漁業・農山漁村の魅力と多面的機能 (2)				
第 5 回	農林漁家民宿・農山漁村レストラン (1)				
第 6 回	農林漁家民宿・農山漁村レストラン (2)				
第 7 回	クラインガルテン・市民農園 (1)				
第 8 回	クラインガルテン・市民農園 (2)				
第 9 回	観光農園・農林水産物直売所 (1)				
第 10 回	観光農園・農林水産物直売所 (2)				
第 11 回	公的交流施設 (道の駅・農林漁業体験実習館・廃校活用施設) と指定管理者制度				
第 12 回	旅館業法等の規制緩和と農山漁村民泊 (1)				
第 13 回	旅館業法等の規制緩和と農山漁村民泊 (2)				
第 14 回	農山漁村ワーキングホリデーとWWOOF				
第 15 回	オーライ！ニッポン運動と教育旅行受入による農山漁村地域の活性化				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
① 授業前にテキストの該当部分を予め読んでおくこと					
② ニュースや新聞に絶えず目を向けておくこと					

成績評価の方法と基準(Grading)		
評価方法	(割合)	評価基準
期末試験 講義ノート記載状況 受講態度	(40%) (40%) (20%)	秀：必要なキーワードを過不足なく用いて、論理的に客観的な説明ができ、かつ、問題点を的確に指摘できている 優：キーワードを用いながら論理的に客観的な説明ができ、かつ、問題点を理解している 良：おおよその説明はできており、かつ、問題点を理解している 可：しくみや問題点の説明において、最低限の水準を満たしている 不可：しくみや問題点が説明できていない
テキスト (Textbook)		【書名】 グリーンライフ入門 【著者】 佐藤誠・篠原徹・山崎光博（編著） 【出版社】 農山漁村文化協会 【出版年】 2005年
参考書・資料等 (Supplementary Reading)		適宜紹介
備 考 (Other Information)		・指定時期までにテキストを入手しない場合は受講を認めない。また、講義後は毎回ノートを提出してもらうため、バインダー（ルーズリーフ）方式のノートを用意すること。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)		研究室（4号館4F南側一番奥）前に掲示したTel/Mail等へ連絡もしくは在室時に直接面談

科目名称 (Course Title)				担当教員(Instructor)	
グローバル特別講義Ⅱ（外国文化論）				井口 和起	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	1 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
グローバル化が著しく進んだ現代世界の中で、日本文化圏のなかで暮らしている私たちの生活も、他の国や地域の人びとの諸活動とのつながり、言い換えると、「外国文化」あるいは「異文化」圏との人・モノ・情報などの交流を抜きにして成り立ってはいません。他方、私たちは異文化地域に影響を与えてもいます。この授業では、私の中国での教師生活や生活体験、歴史資料や少数民族村落調査、加えてバチカン市国での日本近世資料整理の仕事に参加した体験などを紹介しつつ、外国文化＝異文化への接し方や理解の仕方、同時に異文化間の交流のあり方などをみなさんと意見交換しながら考えていきます。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
「外国文化」（ここでは、現代中国の文化を事例としますが）を「理解」とはどういうことか。この課題を考えるために単に感覚的な把握（「共感」や場合によっては「嫌悪」）に止まるのではなく、理性的な把握のための基本的な思考の枠組の理解を深め、国際的な視野や人権意識を持って活動できる素地を身につけるとともに、日本文化のとらえ直しと人類普遍の価値への理解を深める視点を獲得することを目指します。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	ガイダンス：「外国文化」とは何か？この授業のねらい				
第 2 回	1980年代の中国・西安の第一印象				
第 3 回	中国・西安外国語大学（学院）での授業				
第 4 回	中国・西安外国語大学の学生たち				
第 5 回	1980年代の中国・西安の暮らし				
第 6 回	1980年代の中国・シルクロードの旅				
第 7 回	1980年代の中国・南京・東北の調査旅行				
第 8 回	2000年代の中国・雲南農業大学との共同研究―研修プランづくり―				
第 9 回	2000年代の中国・元陽・棚田の少数民族の暮らし				
第 10 回	現代中国の学生たち―中国・瀋陽・東北大学で―				
第 11 回	バチカン市国図書館の日本古文書―整理をめぐって―				
第 12 回	バチカン市国図書館の日本古文書―修復をめぐって―				
第 13 回	異文化理解のために ―考え方や振る舞いの違いと言語構造―				
第 14 回	異文化交流のために ―宗教や歴史の相互理解―				
第 15 回	まとめ グローカリストを目ざすみなさんへの期待				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
予習の必要はほとんどありません。そのかわり、毎授業時間ごと、終了時に簡単な感想や意見を書いて提出してもらいます。また、授業の進行の中で適宜ノート提出を要求するので、復習として必ずノートを整理しておくこと。さらに、参考文献は授業の最終回までに必ず読み終えておくこと。					

成績評価の方法と基準 (Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
授業中の討論への参加 (20%) 提出ノートの内容 (30%) 最終レポート (50%)	秀：外国文化理解の基本的な思考の枠組を理解し、適切な事例を引いてそれを自分の言葉で説明し、自国文化の特質を異文化圏の聴き手に伝えることができ、鋭い人権感覚を持っている。 優：外国文化理解の基本的な思考の枠組を理解し、例を挙げて自分の言葉でそれを説明でき、自国文化の特質も語れ、人権意識の重要性を理解している。 良：外国文化理解の基本的な思考とはなにかについて説明ができ、人権意識も持っている。 可：自国文化絶対化の弊を脱し相対化してとらえることができる。
テキスト (Textbook)	【書名】 【著者】 【出版社】 【出版年】
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	鈴木孝夫『ことばと文化』（岩波書店：青版C98、2014年） 青木保『異文化理解』（岩波書店：赤版740、2015年）
備 考 (Other Information)	
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	一覧表参照。

科目名称 (Course Title)				担当教員 (Instructor)	
グローバル特別講義Ⅱ（公共経営演習Ⅱ）				谷口 知弘 / 杉岡 秀紀	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	1 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
阪神淡路大震災を契機に行政セクターを補完する市民セクター（非営利市民活動組織）が大きな役割を担う力を有することが明らかとなった。加えて、近年は社会起業家やソーシャルビジネスへの注目が集っている。このように、社会課題の解決や未来創造において異なるセクターが協働するマルチパートナーシップは不可欠となってきた。 一方、マルチパートナーシップによる地域経営は始まったばかりであり多くの課題を抱えている。そこで、「グローバル特別講義Ⅰ」と「グローバル特別講義Ⅱ」では、市民セクター、企業セクター、行政セクターの現場からの報告より、各セクターの役割や課題、可能性を探求し、特に福知山市を中心に北近畿におけるマルチパートナーシップのあり方や仕組みについて議論する。 本講義においては、市民セクター、企業セクターからゲストスピーカーをお招きし、講義とワークショップを行う。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
市民セクター、企業セクター及び行政セクターの役割や課題、可能性について理解を深める。福知山市を中心に北近畿においてマルチパートナーシップによる社会課題解決の現況を把握する。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	導入：講義概要と問題意識の共有				
第 2 回	第 1 部 市民セクターの活動-1 ①商業振興とまちづくり				
第 3 回	〃 ②観光振興と地域活性化				
第 4 回	〃 ③若者の育成と地域社会				
第 5 回	〃 ●ワークショップ				
第 6 回	市民セクターの活動-2 ④子育て支援				
第 7 回	〃 ⑤アートと地域社会				
第 8 回	〃 ⑥農山漁村、中山間地域の振興				
第 9 回	〃 ●ワークショップ				
第 10 回	第 2 部 企業セクターの活動 ①企業の社会貢献活動				
第 11 回	〃 ②ソーシャルビジネス-1				
第 12 回	〃 ③ソーシャルビジネス-2				
第 13 回	〃 ●ワークショップ				
第 14 回	第 3 部 セクターを越えて福知山公立大学の役割と協働型社会				
第 15 回	まとめ：振り返りと協働型社会を描く対話				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
予習：各回のテーマについて、文献やインターネットによる調査、自身の関心を整理するなどあらかじめ学習しておくこと。 復習：講義で得た気づきや成果をレポートにまとめること。 また、日常的に新聞を読むなど広く社会の動きに関心を持ち、福知山市を中心に北近畿の公共政策や市民活動に関わって関心や問題意識を高めること。					

成績評価の方法と基準（Grading）	
評価方法 （割合）	評価基準
クラスへの貢献（50%） 期末レポート（50%）	秀：行政の役割と各分野の事業内容を理解して、問題点を的確に指摘でき、かつ、問題解決の優れた政策を提示できる。 優：行政の役割と各分野の事業内容を理解して、問題点を的確に指摘し、かつ、問題解決の適切な政策を提示できる。 良：行政の役割と各分野の事業内容を理解して、問題点を的確に指摘できる 可：行政の役割と各分野の事業内容について、最低限の理解はできている。 不可：行政の役割と各分野の事業内容が説明できない。
テキスト (Textbook)	【書名】 【著者】 【出版社】 【出版年】 ※特になし。授業で配布するレジュメを中心に行う。
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	・毎講義のレジュメの中で、適宜、参考文献を紹介する
備考 (Other Information)	・「グローバル特別講義Ⅰ（公共経営演習Ⅰ）」と合わせて履修することが望ましい。 ・詳細は変更する可能性があるので、後日掲示板で連絡する。 ・ゲストの都合により、変更がありうるので掲示に注意すること。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	・ sugioka-hidenori@fukuchiyama.ac.jp（杉岡）、 taniguchi@co-design.info（谷口）

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
グローバル特別講義Ⅱ（社会学）				中尾 誠二	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	1 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
日本の社会が人口減少時代を迎え、2014年5月には日本創成会議が全国896市町村を「消滅可能性」の高い自治体とする「増田レポート」を発表し、2014年9月には「地方創生」担当大臣を長とする「まち・ひと・しごと創生本部」が発足した。この授業では、大きな転換期にある現代日本の社会課題に関する全般的な知識をテキスト等から学び、意見発表・討論も行いながら、世界情勢を踏まえた日本社会に関する理解力と表現力を養う。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
当授業の目的は、現代日本の社会課題を理解し、その現状に対する問題意識と自分の考え方を表現できるようになることである。したがって、以下の2点を最終到達目標とする。 (1) わが国の社会課題について、必要なキーワードを過不足なく用いて、文章で説明ができるようになること (2) その現状に対して、自分の考え方を口頭および文章で表現できるようになること					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	イントロダクション：貴方が生まれ育った地域の社会的な課題は何ですか？				
第 2 回	地方の消滅論と創生問題：地方創生論の枠組み・自治体消滅論の隆盛				
第 3 回	地方の消滅論と創生問題：汎用性に富む地方創生の考え方・消滅論批判の限界と課題				
第 4 回	地方消滅と少子化対策問題：東京一極集中論・少子化対策と経済問題				
第 5 回	地方消滅と少子化対策問題：北海道の未来先取り・人口減少社会における地方創生				
第 6 回	サステナビリティ論による地方創生研究：社会システム・サステナビリティ				
第 7 回	サステナビリティ論による地方創生研究：限界集落地域の概況・社会理論化への展開				
第 8 回	コミュニティのDL理論と内発的発展：コミュニティ論の動向・DL理論				
第 9 回	コミュニティのDL理論と内発的発展：内発的発展論と地方創生論				
第 10 回	地方創生と労働者の福祉活動：職業活動と福祉活動・過疎の地域社会				
第 11 回	地方創生と労働者の福祉活動：大都市の現状・幸福の条件				
第 12 回	介護のマイクロマクロ問題：介護のどこに焦点を置くか				
第 13 回	介護のマイクロマクロ問題：介護サービス提供の問題				
第 14 回	巨大企業と都市開発問題：衰退した地方都市の姿・企業都市の盛衰				
第 15 回	巨大企業と都市開発問題：室蘭の都市的停滞・都市的活性化				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
① 授業前にテキストの該当部分を予め読んでおくこと ② ニュースや新聞に絶えず目を向けておくこと					

成績評価の方法と基準 (Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
各授業時の提出課題等 (50%) 期末試験 (50%)	秀：必要なキーワードを過不足なく用いて、論理的に客観的な説明ができ、かつ、問題点を的確に指摘できている 優：キーワードを用いながら論理的に客観的な説明ができ、かつ、問題点を理解している 良：おおよその説明はできており、かつ、問題点を理解している 可：しくみや問題点の説明において、最低限の水準を満たしている 不可：しくみや問題点が説明できていない
テキスト (Textbook)	【書名】「地方創生と消滅」の社会学：日本のコミュニティのゆくえ 【著者】金子 勇 【出版社】ミネルヴァ 書房 【出版年】2016年
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	適宜紹介する
備 考 (Other Information)	指定時期までにテキストを入手しない場合は受講を認めない。 3分の1以上（6回以上）の欠席は、単位不可とする。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	研究室（4号館4F南側一番奥）前に掲示したTel/Mail等へ連絡 もしくは在室時に直接面談

科目名称(Course Title)				担当教員 (Instructor)	
グローバルビジネス（国際経営論）				平野 真	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	3 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要(Course Description)					
現代においては、企業も人も、グローバル化と無関係に生きていくことはもはやできない。国際環境の変化の中で、どのように企業を経営していくか、また人や社会も、どのように考え行動していくか、絶えず考え続けていかねばならない。授業では、前半、国際的な取引や企業経営の現実的な問題をビデオなどを見ながら具体的に事例に沿って考えていき、同時に必要な知識をまとめていく。後半では、人や企業と社会、あるいは地域と世界がどのような関係を生み出していけばいいのか、専門的な知識に基づき考える力を養う。特に、文化の異なる他国の人々との付き合い方、といった日常的な視点や実務的な話も含めて、企業のみならず地域社会の人々がグローバル化とどのように向き合い考えていく必要があるのか、世界全体が持続可能な発展を続けるにはどうしたらいいのかなどを考えていく。なお授業の進め方や評価手法については、多少の変更を行うことがある。					
授業の到達目標(Course Objectives)					
1)国際化に関係して企業が考えなければならない主要課題について説明し、具体的な対策を挙げることができる。2)国による企業経営の在り方の違いを例をあげて説明でき、グローバル社会の中で企業経営や海外活動をどのように考えていけばいいか、自分の考えを述べられる。					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	オリエンテーション（授業の概要、評価の説明、グローバル化とは？）				
第 2 回	第一部国際経営学の基礎(1)企業活動の国際化：イタリア、フェラガモ社の事例				
第 3 回	第一部国際経営学の基礎(2)多国籍企業：レナウンの中国企業による買収事例				
第 4 回	第一部国際経営学の基礎(3)グローバル化とローカル化：台湾の半導体企業の事例				
第 5 回	第一部国際経営学の基礎(4)異文化問題：インドネシアの金融事業の事例				
第 6 回	第一部国際経営学の基礎(5)海外生産と産業空洞化：タイの金型事業の事例				
第 7 回	第一部国際経営学の基礎(6)国際マーケティング：海外で活躍する日本の若者の事例				
第 8 回	第一回テスト：第一部の復習とまとめ				
第 9 回	第二部国際経営の実務と戦略(1)国際業務とリスク管理（NEL America社）				
第 10 回	第二部国際経営の実務と戦略(2)米国における企業経営（日米半導体戦争）				
第 11 回	第二部国際経営の実務と戦略(3)中国における企業経営（アモイの中国企業ほか）				
第 12 回	第二部国際経営の実務と戦略(4)アジアにおける企業経営（インドでの事業例）				
第 13 回	第二部国際経営の実務と戦略(5)国際競争と国際連携（半導体国際分業など）				
第 14 回	第二部国際経営の実務と戦略(6)グローバル社会の課題（不都合な真実）				
第 15 回	第二回テスト：第二部の復習とまとめ				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
授業で特に重要なのは復習である。授業で学習した内容がよく理解できない場合や授業中に埋めるべきレジュメの空欄が埋められなかった場合は、必ず次回に質問して理解を深めるようにする。6回分の授業が終わるごとに整理しなければならない事項のテストがあり、この準備をすることを通じ、知識を頭の中に整理する。					

成績評価の方法と基準 (Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
小テスト (20%) 第一回中間テスト (20%) 第二回中間テスト (20%) 最終テストまたはレポート (40%)	秀：適切に問題点を指摘し、特筆すべき鋭い分析や考察ができ、現実的な解決策を提示できる 優：授業で学習したことを良く理解でき指摘した問題点に対し適切な解決策を提示できる 良：授業で学習した内容を基本的には理解でき、指摘した問題点に対し解決策を提示できる 可：授業内容の理解、問題点の指摘と解決策の提示が、最低限の水準を満たしている 不可：授業の内容が理解できておらず、問題点や解決策の提示ができない、あるいは3分の1を超えて欠席した
テキスト (Textbook)	【書名】 【著者】 【出版社】 【出版年】 授業で配布するレジュメを中心に行う。
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	「現代グローバル経営要論」山下達哉、高井透著、同友館。ほかに講義のレジュメの中で、参考文献を紹介する。
備考 (Other Information)	3分の1以上（6回以上）の欠席は、単位不可とする
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	メール連絡 hirano-makoto@fukuchiyama.ac.jp

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
経営工学概論 (企業システム論/生産システム論)				三品 勉	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	2 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要(Course Description)					
経営工学の英語表記は多種にわたるが、世界で最も多く使われ、また歴史があるのは IE(Industrial Engineering)である。経営工学はもともと生産システムを主として扱うことから出発しているのがその理由である。現在では企業運営全体をその対象とし、効率的な経済活動を行う強力な手段として活用されている。本講義では伝統的に扱われている生産システムを例として取り上げ、生産システムの基礎知識と、その成り立ちについて解説する。生産現場ではどのような工夫と実践をして、我国各社が世界に誇る生産体制を作り出しているかを述べる。また新しい経営工学の概念についても説明する。					
授業の到達目標(Course Objectives)					
経営工学の概要を理解し、生産活動や役割の分析・促進に経営管理に関する諸手法が使われていることを説明することができる。生産システムの全体最適化の概念と、生産に関わる品質やコスト構造を理解することができる。需要予測・フレキシブル生産体制・SCM等の概念を述べることができる。					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	経営工学の概要－目的と対象範囲 企業活動の理解				
第 2 回	生産活動と経営管理				
第 3 回	流れづくりとしての生産システム 小テスト (1)				
第 4 回	流れの分析				
第 5 回	JITとTOC ボトルネックへの対応				
第 6 回	品質の概念 小テスト (2)				
第 7 回	コスト構造とCVP分析				
第 8 回	生産の計画と統制				
第 9 回	MRP 小テスト (3)				
第 10 回	フレキシブルな生産システムフレキシブルな生産システム				
第 11 回	SCM				
第 12 回	需要予測とブルウィップ効果 小テスト (4)				
第 13 回	生産拠点の世界各地への分散				
第 14 回	新製品開発とMOT				
第 15 回	総まとめ 小テスト (5)				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
前回学習した部分と、次回に関わる分の教科書を読んでおくこと。多くの学説や用語が出てくるが、経営学をより深くかつ広く学ぶ際に役立つので、基本的なものは皆覚えること。変化している生産システム体系の流れを、その原因・結果・他への影響といったストーリー性を持って理解すると楽しく学べるので実践してほしい。					

成績評価の方法と基準 (Grading)		
評価方法	(割合)	評価基準
小テスト 授業参加	(90 %) (10 %)	小テスト (1) ~ (5) の総計 議論・質問・コメントによる授業への参加回数
テキスト (Textbook)		【書名】 コア・テキスト生産管理 【著者】 富田・糸久 【出版社】 新世社 【出版年】 2015
参考書・資料等 (Supplementary Reading)		必要に応じて指示する
備 考 (Other Information)		特になし
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)		Eメール

科目名称 (Course Title)				担当教員(Instructor)	
経営分析（簿記演習Ⅱ/会計実務Ⅱ）				遠藤 尚秀	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	2 年次	講義	無	科目等履修
授業の概要 (Course Description)					
会社の業績評価の把握、得意先・貸付先企業の与信管理、企業買収の可否・評価額の決定、資金運用の投資先の選択、監査における比較分析など様々な場面において、企業の企画・経理財務担当者、公認会計士・税理士・コンサルタント等の専門家等にとって、財務分析の能力は不可欠なツールである。また、学生にとっては、就職先の良しあしの判断に、経営分析は極めて有用である。分析的手法を習得することにより、単に財務諸表の数値を表面的に閲覧するにとどまらず、様々な場面で有用な情報として加工できるような応用力を育成する。本講義では、教員から一方的に講義をするのみならず、各受講生自身で具体的な企業の生の情報を加工し、課題を見つけて議論を深めていくことを望む。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
財務諸表分析で、会社（組織）の経営成績・財政状態・資金繰りを自身で把握し評価できるようになる。財務分析の相互関連性から経営活動が及ぼす善循環・悪循環、改善・悪化を理解する。他者に対して、データに基づき、自己の見識を客観的に説明できるようになる。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	決算書と経営分析				
第 2 回	収益性分析-比率分析：各種資本利益率				
第 3 回	収益性分析-比率分析：売上高利益率				
第 4 回	収益性分析-比率分析：資本回転率、棚卸資産回転率、固定資産回転率他				
第 5 回	収益性分析-実数分析：損益分岐点分析の手順				
第 6 回	収益性分析-実数分析：損益分岐点分析と短期利益計画策定				
第 7 回	成長性分析：売上高成長率、当期純利益成長率他				
第 8 回	小テストと解説				
第 9 回	安全性分析（短期資金繰り）：流動比率、当座比率				
第 10 回	安全性分析（長期資金繰り）：固定比率、固定長期適合比率				
第 11 回	キャッシュ・フロー分析：キャッシュ・フロー計算書の3区分の収支による分析				
第 12 回	バランス・スコア・カード：財務情報と非財務情報				
第 13 回	事例発表				
第 14 回	事例発表				
第 15 回	総まとめ				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
① 指定したテキストの次回の講義内容に関する章を事前に読んでおくこと。 ② 小テスト、期末試験（振り返り）を実施するので、授業終了後は全体像とポイントを意識し、テキストや授業で配布した資料を十分に読み込み、都度、復習をすること。 ③ ニュースや新聞に絶えず目を向けて、様々な組織における経営課題についての問題意識を養うこと					

成績評価の方法と基準(Grading)		
評価方法	(割合)	評価基準
期末試験 小テスト 受講態度	(60%) (30%) (10%)	秀：様々な分野における管理会計の理論に関して、必要なキーワードを過不足なく用いて、論理的に客観的な説明ができ、課題を的確に解決できている。 優：キーワードを用いながら論理的に客観的な説明ができ、かつ、課題を理解している。 良：おおよその説明はできており、かつ、課題を理解している。 可：理論や課題の説明において、最低限の水準を満たしている。 不可：理論や課題が説明できていない。
テキスト (Textbook)		【書名】 新版 入門経営分析 【著者】 倉田三郎編集 【出版社】 同文館出版 【出版年】 2015年12月
参考書・資料等 (Supplementary Reading)		必要に応じてレジュメや事例等を配布する。 適宜、参考文献を紹介する。
備 考 (Other Information)		簿記論、会計学、管理会計の学習経験があることが望まれる。工業簿記、原価計算論、経営学科目も履修することが望ましい。 一方通行の授業とならぬように、可能な限り双方向の授業を実施するため、積極的な参加を望む。 授業には、教科書の他、電卓も持参すること。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)		具体的なオフィスアワーの曜日・時限については、オフィス前に掲示しておく。 質問があれば下記のメールでも適宜、受けつける。 Email: endo-naohide@fukuchiyama.ac.jp

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
経済学入門				三好 ゆう	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	1 年次	講義	無	科目等履修
授業の概要 (Course Description)					
経済学は200年以上も続いている学問である。経済学の巨匠達は、「すべての人々が幸せになるためにはどうしたらよいか」、「社会のしくみにより貧困に喘ぐ人々が生みだされているならば、どのように改善することで解決できるのか」を長い歴史をかけて考え続けてきた。 経済学モデルは日々進化しているようにみえて、実はその理論の背後にある思想は新しいものではない。発展しつつも螺旋的に繰り返されてきたといえる。 そこで本講義では、古典といわれる幾つかの名著の要点をおさえつつ、そこでの経済理論が日常生活にどのように生きているか、日常生活での現象をどのように説明することができるかを理解することを目的とする。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
本講義の最終到達目標は、経済学の基本姿勢を理解し、今後、経済学の応用分野を学ぶにあたっての基礎的知識を身につけることにある。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	イントロダクション ―経済学の扱う対象―				
第 2 回	人間と動物は違うのか ―自然状態における人間がもつ私的所有権―				
第 3 回	社会秩序を導く人間本性とは何か ―同感の重要性―				
第 4 回	どうしたら富は増えるのか ―市場の自動調整メカニズムと分業の利益―				
第 5 回	価値とは何か ―交換価値と労働価値―				
第 6 回	なぜ貿易をするのか ―絶対優位と比較優位―				
第 7 回	快樂（幸福）の最大化は正しい行動と言えるのか ―最大多数の最大幸福―				
第 8 回	恐慌から脱出できるのか① ―セイの法則と有効需要の原理―				
第 9 回	〃 ② ―乗数理論―				
第 10 回	〃 ③ ―流動性選好説―				
第 11 回	社会現象に法則性はあるのか① ―疎外の本質―				
第 12 回	〃 ② ―搾取と蓄積―				
第 13 回	生産力、資金、商業さえあれば、資本主義は生まれるのか ―資本主義の精神―				
第 14 回	資本主義の発展を支える革新とは何か ―企業家の新結合―				
第 15 回	経済学はいま何を考えているか				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
① 毎講義で講義内容についての確認テスト（論述）を行うので、レジュメの他、参考書等を活用し、講義内容の確認をしておくこと					
② ニュースや新聞に絶えず目を向けておくこと					

成績評価の方法と基準(Grading)		
評価方法	(割合)	評価基準
期末試験	(60%)	秀：必要なキーワードを過不足なく用いて、説明ができる 優：キーワードを用いながら、概ね説明ができる 良：キーワードを用いながら、ある程度は理解できている 可：キーワードやしくみについて、最低限の理解ができている 不可：キーワードやしくみについて理解できていない
毎講義の確認テスト	(40%)	
テキスト (Textbook)		【書名】 【著者】 【出版社】 【出版年】 ※特になし。授業で配布するレジュメを中心に行う。
参考書・資料等 (Supplementary Reading)		・小室直樹（2004）『経済学をめぐる巨匠たち』ダイヤモンド社 ・松尾匡（2009）『対話でわかる 痛快明解 経済学史』日経BP社 ※ 毎講義のレジュメの中で、適宜、参考文献を紹介する
備考 (Other Information)		・ 学生の理解に応じて、授業計画（授業の進捗）が前後することがある
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)		週 2 コマをオフィスアワーとする（事前連絡は不要） 具体的な曜日・時限については、オフィス前に掲示しておく

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
原価計算論				遠藤 尚秀	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	2 年次	講義	無	科目等履修
授業の概要(Course Description)					
原価計算の諸目的と仕組みを学習することで、企業、自治体等あらゆる組織の経営実務で必要となる管理会計の基礎を学ぶ。 本講義の流れは、全体像を概観したのち、個別分野ごとに具体的な手法や特徴等を確認する。原価とは何か、目的に応じてどのように計算し、どのように利用するかを学習する。 本講義では、直接、日商簿記 2 級（工業簿記）の試験対策を実施しないが、当該講義を学ぶことで、簿記検定等各種資格試験にも役立つように工夫されている。					
授業の到達目標(Course Objectives)					
本講義の目的は、原価計算の歴史的な変遷に基づく目的別分類ごとに、各々の分野における原価手法とその利用方法について理解することにある。そのうえで、以下の2点を最終到達目標とする。 (1) 原価計算の諸目的と仕組みについて習得する。 (2) 基本的な原価計算手法を使って課題を解決できるようになる。					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	原価計算の概要：意義、目的				
第 2 回	原価の基礎：原価の諸概念、原価分解				
第 3 回	製品原価の計算：費目別計算				
第 4 回	製品原価の計算目的：部門別計算				
第 5 回	製品原価の計算目的：製品別計算（単純総合原価計算）				
第 6 回	製品原価の計算目的：製品別計算（工程別総合原価計算）				
第 7 回	製品原価の計算目的：製品別計算（仕損・減損の処理）				
第 8 回	製品原価の計算目的：製品別計算（個別原価計算）				
第 9 回	小テスト（日商 2 級レベル）と復習				
第 10 回	マネジメント・コントロール目的：標準原価計算				
第 11 回	マネジメント・コントロール目的：原価差異分析				
第 12 回	製品原価の計算/利益管理目的：直接原価計算と損益分岐点分析				
第 13 回	意思決定目的：差額分析				
第 14 回	ABC/ABM(活動基準原価計算)				
第 15 回	総まとめ				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
① 指定したテキストの次の講義内容に関する章を事前に読んでおくこと。 ② 日商簿記 2 級レベルの小テスト、期末試験（振り返り）を実施するので、授業終了後は復習に工業簿記のワークブック等（授業で指定する）で復習をすること。 ③ ニュースや新聞に絶えず目を向けて、実社会で「原価計算」がどのように利用されているかの意識を深めておくこと。					

成績評価の方法と基準(Grading)		
評価方法	(割合)	評価基準
期末試験 小テスト 受講態度	(60%) (30%) (10%)	秀：原価計算の各目的と手法に関して、必要なキーワードを過不足なく用いて、論理的に客観的な説明ができ、課題を的確に解決できている。 優：キーワードを用いながら論理的に客観的な説明ができ、かつ、課題を理解している。 良：おおよその説明はできており、かつ、課題を理解している。 可：しくみや課題の説明において、最低限の水準を満たしている。 不可：しくみや課題が説明できていない。
テキスト (Textbook)		【書名】 エssenシャル原価計算 【著者】 谷 武幸(編著) 【出版社】 中央経済社 【出版年】 2012年3月
参考書・資料等 (Supplementary Reading)		必要に応じてレジュメや事例等を配布する。 適宜、参考文献を紹介する。
備考 (Other Information)		3分の1以上(6回以上)の欠席は、単位不可とする。 工業簿記、簿記論、財務諸表論を同時に履修あるいは履修済みであることが望ましい。 一方通行の授業とならぬように、可能な限り双方向の授業を実施するため、積極的な参加を望む。 授業には、教科書の他、電卓も持参すること。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)		具体的なオフィスアワーの曜日・時限については、オフィス前に掲示しておく。 質問があれば下記のメールでも適宜、受けつける。 Email: endo-naohide@fukuchiyama.ac.jp

科目名称(Course Title)				担当教員 (Instructor)	
公共経営入門				杉岡 秀紀	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	1 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要(Course Description)					
公共経営の現場では、産学公NPOのセクターの文化的・機能的な壁を越えて、地域の公共的活動や政策形成を主導、また、コーディネートできる人材が求められている。また、このような協働型社会におけるマルチセクターを横断する人材には、公共マインドやビジネスマインド、知識のみならず、技法的な側面もますます重視されてきている。 そこで、本講義においては、まず公共とは何か、公共経営とは何か、NPMの基礎について学ぶ。次に公共マーケティングについて、キーとなる概念の学習を毎回行い、ケーススタディを通して現実的な公共課題へ適応し、模擬的に学習していく（2回で1テーマが完結）。 なお、講師は、公共政策大学院修了後、行政、民間企業、NPO、大学など多様な職場で働いてきた経験を持つ。そういった意味から机上の空論ではなく、現場から抽出されたエッセンス、実際の社会で使えるスキルというものに照射して、講義を進める。					
授業の到達目標(Course Objectives)					
以下の知識・スキルを体得することを到達目標とする。 ・対象となる課題群の相互関係を把握し分析することができる。 ・地域における複雑な課題群について、その解決に必要な要素の特定と解決のためのプログラムの提示及び適用ができる。					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	公共とは何か、公共経営とは何か				
第 2 回	公共経営とマーケティング思考				
第 3 回	公共経営とロジカルシンキング				
第 4 回	ケーススタディ（公共課題への適用：ロジカルシンキング）				
第 5 回	公共経営とクリエイティブ・シンキング				
第 6 回	ケーススタディ（公共課題への適用：クリエイティブ・シンキング）				
第 7 回	公共経営とクリティカル・シンキング				
第 8 回	ケーススタディ（公共課題への適用：クリティカル・シンキング）				
第 9 回	公共経営とロジカル・ライティング				
第 10 回	ケーススタディ（公共課題への適用：ロジカル・ライティング）				
第 11 回	公共経営とファシリテーションとフューチャーセッション				
第 12 回	ケーススタディ（公共課題への適用：ファシリテーションとフューチャーセッション）				
第 13 回	公共経営とプレゼンテーション				
第 14 回	ケーススタディ（公共課題への適用：プレゼンテーション）				
第 15 回	ふりかえり、まとめ				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
・予習としては、参考図書を読んでおくことが望ましい。 ・復習としては、毎回配布するレジュメをしっかりと読みなおし、理解を深めること。 ・またペアワークやグループワークのために、日々のニュースや地元新聞を絶えずチェックしておくこと。					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
出席点 (15%) 授業態度・講義への貢献 (25%) 期末レポート (60%)	秀：講義で習った概念やスキルを体得し、自分の言葉で論理的かつ客観的に説明できる。また、課題点も指摘することができる。また、自学自習や実践につなげている。 優：講義で習った概念やスキルを体得し、自分の言葉で論理的かつ客観的に説明できる。また、課題点も指摘することができる。 良：講義で習った概念やスキルを理解でき、他者に一部説明することができる。 可：講義で習った概念やスキルを最低限理解している。 不可：講義で習った概念やスキルを理解できていない。
テキスト (Textbook)	特になし。講義内に配布するレジュメを中心に行う。
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	ユージン・バーダック『政策立案の技法』（東洋経済新報社、2012）、川喜田二郎『発想法－創造性開発のために－』（中公新書、1967）、齋藤嘉則、株式グロービス監修『問題解決プロフェッショナル－思考と技術－』（ダイヤモンド社、1997）、バーバラ・ミント、グロービス・マネジメント・インスティテュート監修、山崎康司訳『考える技術・書く技術－問題解決力を伸ばすピラミッド原則－』（ダイヤモンド社）
備考 (Other Information)	・本講義は、毎回グループワークやケース・メソッドを実施し、学びの双方向性を重視する（アクティブ・ラーニング）。座学スタイルではないため留意すること。 ・3分の1以上（6回以上）の欠席は、単位不可とする。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	Eメール（sugioka-hidenori@fukuchiyama.ac.jp）に連絡すること。

科目名称 (Subject)				担当教員 (Teacher)	
自治体政策法務（自治体法務政策）				福島 貞道	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	2 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
政策法務という言葉が生まれて既に久しいが、その捉え方や理論については識者等によって様々な考え方や議論がある。 この講義では、法治国家である我が国の基本的な統治制度を理解する中で、国として或いは自治体として、それぞれの立場で果たすべき住民の福祉の増進のための政策と、それを実現させるための手法としての法務の関係性を学ぶ。 自治体経営においては、課題解決のためだけではなく、先駆的にその都市の将来を見据えた政策の企画、立案も重要であり、そのような観点から、政策及びその具現化のための条例の制定、その主旨の正しい解釈・運用の下での執行等に係る法務の実際を、実例も参考にしながら学ぶことによって、政策法務の意義及びその在り方について論じることができる基礎的知識と自治体政策法務の実践的能力の基本の習得を目指す。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
政策法務の概要を理解し、国の法制度等との関わりの中で自治体政策法務に係る意義及びその在り方について論じることができる基礎的知識と、条例制定のための基礎的能力を習得できる。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	ガイダンス（実践の視点からの学び）				
第 2 回	基本認識（１） 法治国家				
第 3 回	基本認識（２） 法治制度と法治主義				
第 4 回	政策法務とは（１）				
第 5 回	政策法務とは（２）				
第 6 回	政策法務とは（３）				
第 7 回	日本の政治の仕組（１）				
第 8 回	日本の政治の仕組（２）				
第 9 回	自治体政策法務の重要性				
第 10 回	自治体の政策法務（条例制定）の権原と限界				
第 11 回	実例に基づく政策法務の実際（１）				
第 12 回	実例に基づく政策法務の実際（２）				
第 13 回	条例制定の在り方				
第 14 回	自治体政策法務の要諦				
第 15 回	まとめ				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
・ 講義で学んだことを、継続的にかつ反復的に復習すること。 ・ 政策は、直接、間接に私達の暮らしに関係することです。日常的に新聞等により、社会の動向を把握するようにすること。					

成績評価の方法と基準(Grading)		
評価方法	(割合)	評価基準
平常点	(15%)	秀：我が国の統治制度と政策法務の概要を理解し、的確な問題点の指摘と総合的な観点に基づいた政策の立案及びその具現化のための条例の制定について論じることができる。 優：我が国の統治制度と政策法務の概要を理解し、課題解決のための政策と条例について論じることができる。 良：我が国の統治制度と政策法務の概要が凡そ理解できている。 可：我が国の統治制度と政策法務の最低限の理解ができている。 不可：我が国の統治制度と政策法務に関する理解が一定の水準を満たしていない。
レポート	(15%)	
定期試験	(70%)	
なお、平常点については、真摯で積極的な授業参加の姿勢への評価であり、毎授業時に提出する「感想文（質問含む）」も参考にする。		
	テキスト (Textbook)	【書名】 【著者】 【出版社】 【出版年】 ・ 特になし。 授業に際しレジュメを配布する。
	参考書・資料等 (Supplementary Reading)	・ 適宜、紹介する。
	備 考 (Other Information)	・ 6回以上の欠席者は、定期試験の受験は認めない。
	教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	・ メール等でアポイント

科目名称(Course Title)				担当教員 (Instructor)	
社会調査論 (アドバンスド演習Ⅲ)				佐藤 充	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	2 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
社会調査は、日々変化する社会がどのような状況にあるのかを明らかにし、また社会が直面する問題がいかなる要因によって生じているのかを検討するための有力なツールである。現代社会では、幅広い目的のもとで、大学のみならず行政や企業等により、さまざまな社会調査が実施されている。 本講義は、社会調査の基本的事項（社会調査の目的、歴史、方法論、調査倫理、各種調査の手法、収集データの分析など）を学習して、自らで調査を企画・実施し、収集したデータの分析を行うための基礎的な知識を身につけることを目的とする。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
① 社会調査の基本的な考え方を理解して、的確な方法で適切に調査を企画・実施し、収集したデータを分析できるようになる。 ② 社会調査を実際に行うために必要となる調査倫理を身につける。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	イントロダクション 現代社会と社会調査				
第 2 回	社会調査とは何か				
第 3 回	社会調査の歴史				
第 4 回	社会調査における倫理				
第 5 回	社会調査の対象と方法				
第 6 回	既存の資料・データ収集と活用				
第 7 回	調査票調査の方法（１） 調査のプロセスと方法				
第 8 回	調査票調査の方法（２） 調査票の設計				
第 9 回	調査票調査の方法（３） サンプリングの理論				
第 10 回	調査票調査の方法（４） 調査票調査のデータ化作業				
第 11 回	調査票調査の方法（５） 調査結果の分析				
第 12 回	質的調査の方法（１） 調査のタイプと考え方				
第 13 回	質的調査の方法（２） インタビュー調査とフィールドワークの技法				
第 14 回	質的調査の方法（３） 調査結果の分析				
第 15 回	全体のまとめ より良い調査を行うために				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
① 各講義の最後に、次回までの小課題と予習の範囲を指示する。 ② 講義前には、小課題に取り組むとともに、教科書の指定された範囲を読むこと。 ③ 講義後は、配布資料とノートを読んで復習すること。 ④ ニュースや新聞記事等に目を通し、社会調査データの結果や解釈に注目しておくこと。					

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
診療情報管理特論 (医療管理論特論/疫学概論)				星 雅丈	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	3 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
医療機関で行われている疫学研究や医療統計・病院統計において、必要とされるのは単なるデータの処理手法や統計的分析手法だけではない。データの背景にある医療機関における各専門職者の役割や、情報の流れ、医療制度など診療情報管理士認定試験に向けての勉学の過程において培ってきた知識のすべてを動員して取り組む必要がある。 そこで本講義では、本学科卒の学生が医療機関に就職後、恐らく最も現場で期待される知識「医療統計学」の総復習と疫学研究手法の基礎を学修する。それに併せて、3年間かけて学んできた診療情報管理士認定試験に資する知識の総復習を行う。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
1) 医療における統計学的手法の利用とその適用範囲について説明することができる。 2) 適切な疫学研究方法の選択ができる 3) 医療における診療情報の発生と流れ、および共有のあり方について説明することができる。 4) 医療制度における各種情報の利活用と管理について、説明することができる。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	オリエンテーション	診療情報の管理と分析を学ぶ意義の再確認			
第 2 回	医療統計学の復習	基本統計量、各種検定の手法、医療統計指標について			
第 3 回	疫学研究方法Ⅰ	ケースコントロール研究・コホート研究について			
第 4 回	疫学研究方法Ⅱ	各研究手法の欠点について			
第 5 回	バイアスと交絡因子	バイアスと制御方法、生活の中に存在する交絡因子について			
第 6 回	医療制度・組織・情報Ⅰ	医療・福祉専門職の役割と医療・福祉に関連する法制について			
第 7 回	医療制度・組織・情報Ⅱ	医療機関における組織管理、施設管理、安全管理について			
第 8 回	医療制度・組織・情報Ⅲ	医療における情報の管理と利活用、および各種統計指標について			
第 9 回	医療制度・組織・情報Ⅳ	医療機関における診療情報管理について			
第 10 回	基礎医学・臨床医学Ⅰ	人体の構造と機能、疾病の要因、各種感染症について			
第 11 回	基礎医学・臨床医学Ⅱ	新生物、血液・免疫疾患、呼吸・循環器系疾患について			
第 12 回	基礎医学・臨床医学Ⅲ	消化器、尿路生殖器、精神神経、皮膚筋骨格系疾患について			
第 13 回	基礎医学・臨床医学Ⅳ	医学・医療の用語 (英語による表現) について			
第 14 回	国際疾病分類法Ⅰ	疾病分類と死因、国際的分類法について			
第 15 回	国際疾病分類法Ⅱ	各種疾病の国際分類と退院時要約からの情報抽出・分類について			
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
講義はプリントと診療情報管理士認定試験指定テキストを中心に行う。復習としては配布資料と共にテキストの該当ページを一読して欲しい。疫学に関連する用語は、これまで学んだ範囲にないものがあるため、データ処理の演習などを通して理解を深めて欲しい。					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
・ 期末試験 (80%) ・ 講義中の質疑への対応、講義への参加姿勢 (20%)	秀 : 疫学研究の方法論と統計処理手法、および診療情報管理に資する様々な知識について、 <u>説明でき、問題の作成も可能</u> である。 優 : 疫学研究の方法論と統計処理手法、および診療情報管理に資する様々な知識について、 <u>分かりやすく説明</u> できる。 良 : 疫学研究の方法論と統計処理手法、および診療情報管理に資する様々な知識に関するキーワードについて <u>述べられる</u> 。 可 : 疫学研究の方法論と統計処理手法、および診療情報管理に資する様々な知識に関するキーワードを <u>挙げる</u> ことができる。
テキスト (Textbook)	【書名】 診療情報管理 I～IV 【著者】 日本病院会 【出版社】 株式会社日本病院共済会 【出版年】 2014・2016年7月版
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	『診療情報管理士教育問題集』：(社) 日本病院会 (基礎課程・専門課程・疾病分類法)
備 考 (Other Information)	当科目では、新たに疫学研究の手法を学修すると共に診療情報管理士認定試験に資する知識の総復習を行うため、医療機関において今後期待される統計的分析手法の基礎を身につけ、さらに診療情報管理士認定試験の合格を目指したい者があれば、学外からの科目等履修・聴講も認めたい。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	講義や会議、あるいは出張などにより研究室に不在であることが多いため、火急の際には下記の連絡手段を用いてアポを取ってください。 ・ Email : posymasa@gmail.com ・ 携帯電話 : 090-1616-8855 (ショートメッセージ可)

科目名称(Course Title)				担当教員 (Instructor)	
数学基礎Ⅱ（数学）				三品 勉	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	1 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
数学の手法・考え方は幅広く応用され、あらゆる分野に浸透している。より深く物事を理解するためには欠かせない手段として威力を発し、現在では芸術や文学といった一見数学と関係のない分野でも広く活用されている。コンピュータによる数理モデルの扱いが容易になったからである。本講義では、微分積分学とならんで、数学としてもっとも基礎的な分野である線形代数学を学ぶ。その応用は多岐にわたるが、一例として、経済学や経営学で重要な経営意思決定手法である数理計画法を取り上げる。約 50 年前に開発され、今でもコンピュータソフトで使われているエレガントなシンプレックス法を学ぶ。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
行列と行列式の構造を理解し、基本的な演算ができる。行列の基本変形により、シンプレックス法を計算することができる。その他、経営意思決定に数学がどのように役立っているかについて説明することができる。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	ベクトルと行列				
第 2 回	ベクトルと行列の計算				
第 3 回	非可換性				
第 4 回	逆行列				
第 5 回	掃き出し法				
第 6 回	行列式				
第 7 回	クラメルの公式				
第 8 回	まとめ(1)と中間テスト				
第 9 回	線型変換				
第 10 回	固有値・固有ベクトル				
第 11 回	行列の対角化				
第 12 回	線形計画法				
第 13 回	シンプレックス法の計算				
第 14 回	双対問題				
第 15 回	まとめ(2)と期末テスト				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
授業で学んだテーマについて、関連の問題を必ず解いておくこと。問題はその都度指示する。					

成績評価の方法と基準 (Grading)		
評価方法	(割合)	評価基準
授業内試験	(90 %)	中間テストと期末テスト 議論・質問・コメントによる授業への参加回数
授業参加	(10 %)	
テキスト (Textbook)		【書名】 特になし 【著者】 【出版社】 【出版年】
参考書・資料等 (Supplementary Reading)		線形代数 田島一郎 共立出版株式会社
備考 (Other Information)		数学基礎 I を履修しておくことが望ましい
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)		Eメール

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
地域協働論				杉岡 秀紀	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	1 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要(Course Description)					
地域を構成する主体は「産学公民金労言」と言われるように、実に多様であり、それぞれが地域と深く関わっている。一方、近年地域、とりわけ地域公共を取り巻く環境は、「新しい公共」と呼ばれるように、ますます地域課題が多様化・高度化・複雑化・専門化・不確実化する中で、もはや単独の主体だけでは課題解決できない時代に突入している。 そこで、本講義では、まず地域を構成するアクターやセクターごとにキーとなる概念について学んでいく。また、北近畿地域内外を問わず、第一線のゲストスピーカーの招聘による事例研究を通じ、現場の声にも触れていく。 なお、講師は、公共政策大学院修了後、行政、民間企業、NPO、大学など多様な職場で働いてきた経験を持つ。そういった意味から机上の空論ではなく、現場から抽出されたエッセンス、実際の社会で使えるスキルというものに照射して、講義を進める。					
授業の到達目標(Course Objectives)					
以下の知識・スキルを体得することを到達目標とする。 ・グローバル化する世界と地域社会の関係を理解できる。 ・対象となる課題群の相互関係を把握し分析することができる。 ・地域社会における様々な活動と、活動をにう主体との関係の実践的把握ができる。					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	地域とは何か				
第 2 回	地域協働とコミュニティ（自治会・町内会、小規模多機能自治）				
第 3 回	地域協働と法（憲法と地方自治）				
第 4 回	地域協働と地方分権				
第 5 回	地域協働と新しい公共				
第 6 回	地域協働とボランティア、サービス・ラーニング				
第 7 回	地域協働とNPO、サードセクター				
第 8 回	地域協働とコミュニティビジネス、ソーシャルビジネス				
第 9 回	地域協働人材育成（地域公共人材）				
第 10 回	地域協働とソーシャルデザイン				
第 11 回	地域協働とフューチャーセンター、フューチャーデザイン				
第 12 回	地域協働の事例研究①：大学				
第 13 回	地域協働の事例研究②：企業				
第 14 回	地域協働の事例研究③：NPO				
第 15 回	地域協働の事例研究④：行政				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
・予習としては、参考図書を読んでおくことが望ましい。 ・復習としては、毎回配布するレジュメをしっかりと読みなおし、理解を深めること。 ・またペアワークやグループワークはトピックなテーマを取り上げるため、ニュースや地元新聞に絶えずチェックしておくこと。					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
出席点 (15%) 小レポート (15%) 授業態度・講義への貢献 (10%) 期末レポート (60%)	秀：講義で習った概念を自分の言葉で論理的かつ客観的に説明でき、かつ課題点も指摘することができる。また、自学自習や実践につなげている。 優：講義で習った概念を自分の言葉で論理的かつ客観的に説明でき、かつ課題点も指摘することができる。 良：講義で習った概念を理解でき、他者に一部説明することができる。 可：講義で習った概念を最低限理解している。 不可：講義で習った概念を理解できていない。
テキスト (Textbook)	特になし。講義内に配布するレジュメを中心に行う。
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	真山達志・今川晃・井口貢『地域力再生と政策学』（ミネルヴァ書房、2010）、野村恭彦「フューチャーセンターをつくろう」（プレジデント社、2012）、今川晃編『地域公共人材をつくる』（法律文化社、2013）、青山公三・小沢修司・杉岡秀紀・藤沢実『もうひとつの「自治体行革」』（京都政策研究センターブックレット vol. 2)』（公人の友社、2014）、白石克孝・石田徹編『持続可能な地域実現と大学の役割』 地域公共人材叢書第3期第1巻（日本評論社、2014）、今川晃編『地方自治を問いなおす』（法律文化社、2014）、杉岡秀紀編著『地域力再生とプロボノ』（京都政策研究センターブックレット vol. 3)』（公人の友社、2015）、西條辰義『フューチャーデザイン』（勁草書房、2015）、青山公三・小沢修司・杉岡秀紀ほか
備考 (Other Information)	・本講義は、毎回ペアワークやグループワーク実施し、学びの双方向性を重視する（アクティブ・ラーニング）。完全な座学ではないため留意すること。 ・3分の1以上（6回以上）の欠席は、単位不可とする。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	Eメール（sugioka-hidenori@fukuchiyama.ac.jp）に連絡すること。

科目名称 (Subject)				担当教員 (Teacher)	
地理学				福島 貞道 / 塩見 直紀	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	1 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
地理学とは、「地表の自然・人文にわたる諸現象を、環境・地域・空間などの概念に基づいて解明しようとする学問」（『最新地理学用語辞典』）である。本授業では、地域経営やまちづくり、観光、交流等の観点から、地理学を学んでいく。特に、風景、景観、都市性、歴史、地域文化、農村風景、棚田、里山、独特な気候、独特な地形を活かした観光やまちづくりを例にし、地理的見方や地理的な考え方を育む。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
・ 地理学について基本的な知識を修得する。 ・ 風景、景観、都市性、歴史、地域文化、農村風景、棚田、里山、独特な気候、独特な地形を活かした観光やまちづくり、地域振興策へとつながる感性やまなざしを獲得する。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	ガイダンス及び地理学を学ぶ意義				
第 2 回	日本の風土、伝統、文化（まちづくりに対する基本的感性の源）（1）				
第 3 回	風景を活かした観光、まちづくり				
第 4 回	景観を活かした観光、まちづくり				
第 5 回	都市性を活かした観光、まちづくり				
第 6 回	歴史を活かした観光、まちづくり				
第 7 回	地域文化を活かした観光、まちづくり				
第 8 回	小括、試験（1）				
第 9 回	日本の風土、伝統、文化（まちづくりに対する基本的感性の源）（2）				
第 10 回	農村風景をいかした観光、まちづくり				
第 11 回	棚田をいかした観光、まちづくり				
第 12 回	里山をいかした観光、まちづくり				
第 13 回	独特な気候を活かした観光、まちづくり				
第 14 回	独特な地形を活かした観光、まちづくり				
第 15 回	小括、試験（2）				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
・ 居住地や故郷、旅先等も地形や気候、地域文化など、絶えず関心をもって目を向け、地理的な見方、地理的な考え方をもちてすごすこと。					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合) 毎回配布する授業シート (50%) 小括時の試験 (50%)	評価基準 秀：必要なキーワードを過不足なく用いて、論理的に客観的な説明ができ、かつ、問題点を的確に指摘できている。 優：キーワードを用いながら論理的に客観的な説明ができ、かつ、問題点を理解している。 良：おおよその説明はできており、かつ、問題点を理解している。 可：しくみや問題点の説明において、最低限の水準を満たしている 不可：しくみや問題点が説明できていない。
テキスト (Textbook)	【書名】 【著者】 【出版社】 【出版年】 ・講義に際し、レジュメを配布する。
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	・適宜、紹介する
備 考 (Other Information)	・ 6 回以上の欠席者は、定期試験の受験は認めない。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	・ メール等でアポイント

科目名称 (Course Title)				担当教員(Instructor)	
日本経済論				齋藤 達弘	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	1 年次	講義	無	科目等履修
授業の概要 (Course Description)					
この授業では戦後の日本経済のあゆみを学ぶ。日本は戦後に奇跡の復興を遂げ、高度経済成長を経て世界有数の経済大国となった。その後、二度のオイル・ショックを乗り越え、バブルの生成・崩壊を経て、金融危機からデフレへと推移してきた。2008年、世界金融危機・同時不況が起こり、その影響で日本経済はデフレの時代が続いた。経済が低迷した1990年代と2000年代を指して「失われた20年」（空白期）とよばれている。2013年からアベノミクスが打ち出され、現在に至っている。 授業は、テキストの章立てにしたがい、補足しながら進め、予習に基づく報告（何が書かれていたか）や意見（何が重要なポイントと考えるか）を受講生と質疑する形式で進める。 経済現象を深く理解するためには、経済学を踏まえた分析と考察が求められる。本学における経済学は、ミクロ経済学、マクロ経済学、財政学、金融論などの授業科目で学ぶことになる。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
この授業の到達目標は、 (1) 日本経済の繁栄を支えてきた機能 (2) 日本経済の実態（何が機能不全に陥っているのか） を理解することである。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	ガイダンスと日本経済論の全体像				
第 2 回	講義ノート（GDP・三面等価の原則・名目と実質）				
第 3 回	テキスト 第1章				
第 4 回	テキスト 第2章と第3章				
第 5 回	やさしい経済学 市場の機能（市場メカニズム）				
第 6 回	テキスト 第4章と第5章				
第 7 回	前半のまとめ				
第 8 回	中間試験と解説				
第 9 回	やさしい経済学 サービス産業と生産性向上（成長会計）				
第10回	テキスト 第6章と第7章				
第11回	やさしい経済学 貿易は豊かにする（比較優位）				
第12回	テキスト 第8章と第9章				
第13回	やさしい経済学 合成の誤謬				
第14回	テキスト 第10章と第11章				
第15回	後半のまとめ				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
授業は授業計画にしたがって進める予定である。次回の内容（テキストや講義ノート、講義資料）を予習し、報告や意見の求めに応じる準備しておくこと。					

成績評価の方法と基準(Grading)		
評価方法	(割合)	評価基準
中間試験 期末試験	(50%) (50%)	秀：キーワードや考え方を特筆すべき水準で理解している。 優：キーワードや考え方を適切な水準で理解している。 良：キーワードや考え方をおおよその水準で理解している。 可：キーワードや考え方を最低限の水準で理解している。 不可：キーワードや考え方の理解が最低限の水準に達していない。
テキスト (Textbook)		【書名】 『最新 日本経済入門 [第5版]』 【著者】 小峰隆夫・村田啓子 【出版社】 日本評論社 【出版年】 2016年
参考書・資料等 (Supplementary Reading)		釣雅雄『入門 日本経済論』 新世社、2014年。 宮崎勇・本庄真・田谷禎三『日本経済図説 (第四版)』 岩波新書、2013年。
備 考 (Other Information)		授業計画に則して進める予定であるが、状況に応じて授業計画を変更することがある。また、受講者数により評価方法を変更することがある。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)		メール連絡。

科目名称(Course Title)				担当教員 (Instructor)	
プログラミングⅡ				神谷 達夫	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	1 年次	講義	有 (15名)	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
この講義は、プログラミングⅠに続き、データ処理の基礎を習得することを目的としている。したがって、本講義で取り扱う言語はPythonである。 この講義では、プログラミング言語Pythonを用いて簡単な統計処理のプログラムが作成できるようになることを目指している。ファイル操作を復習した後、一般的に用いられる統計手法のプログラムを作成したり、普及している統計処理ライブラリを実行することにより、基本的なプログラムによる統計処理を経験する。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
プログラミング言語Pythonを用いて、データ処理のプログラムを作成できるようになる。また、基本的な統計処理の流れを理解できるようになる。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	オリエンテーション	講義の進め方と講義の概要説明			
第 2 回	ファイル操作	データファイルの作成と読み込み			
第 3 回	基本統計量の算出	基本統計量を求めるプログラムを作る			
第 4 回	回帰分析の基礎	簡単な回帰分析プログラムの作成			
第 5 回	回帰分析と相関係数	相関係数の計算と回帰分析のプログラムを作る			
第 6 回	重回帰分析	重回帰分析プログラムを実行する			
第 7 回	t検定の基礎	t検定のプログラムを実行する			
第 8 回	色々なt検定	条件を変更してt検定のプログラムを実行する			
第 9 回	分散の差の検定	F検定のプログラムを実行する			
第 10 回	χ^2 検定の基礎	χ^2 検定プログラムの実行と期待値の計算			
第 11 回	χ^2 検定の基礎	クロス集計表の作成と χ^2 検定			
第 12 回	相関係数の検定	相関係数の検定			
第 13 回	分散分析	分散分析プログラムの実行			
第 14 回	2元配置分散分析	2元配置分散分析プログラムの実行			
第 15 回	まとめ	総合演習			
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
プログラミングできるようになるには、授業以外でもプログラムを作成することが重要である。帰宅してからでもプログラムが作成できるような環境を用意し、自分で作ったプログラムを実行することが理解への近道である。 この講義では、プログラム作成の課題が出題されるため、その課題を解く時間を確保すること。					

成績評価の方法と基準(Grading)		
評価方法	(割合)	評価基準
期末試験 レポート・課題提出	(60%) (40%)	秀：講義で扱ったプログラミングの知識とその応用方法を論理的に説明でき、その知識を応用できる 優：講義で扱ったプログラミングの知識とその応用方法を論理的に説明できる 良：おおよその説明はできており、かつ、簡単なプログラムは作ることができる
テキスト (Textbook)		【書名】 講義内で指示する 【著者】 【出版社】 【出版年】
参考書・資料等 (Supplementary Reading)		講義中に参考文献を紹介する
備 考 (Other Information)		3分の1以上（6回以上）の欠席は、単位不可とする
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)		電子メールによる

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
文学（比較文学）				井口 和起	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	1 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要(Course Description)					
「君死にたまふこと勿れ」（詩）の作者、与謝野晶子の文学作品を素材に作家の生きざまと文学について考えていきます。彼女は人名辞典などでは、歌人、作家、思想家などと解説されたとおり、まず女流歌人として登場しますが、詩や童話や小説、それに数多くの評論を書いています。ですから文学のさまざまなジャンルに接することができます。また、彼女は明治・大正・昭和（戦前期）を生き抜き、戦争について、女性の生き方について、教育についてなど、時代の大きな課題に立ち向かっています。授業では、彼女の作品（歌、詩、小説、評論、旅行記など）を時代を追って読み進め、その生きざまを作品をとおして考察し、彼女にとって、文学の営みはどんな意味を持っていたのかを考えてみたいと思います。					
授業の到達目標(Course Objectives)					
多様なジャンルの文学作品を理解でき、鑑賞する能力を高める。そのうえで、各作品の意味を時代の中に位置づけて理解でき、最終的には文学作品をその作家の生きざまの中でとらえ、視野を広げて他の作家の作品についても関心を向け、文学に親しみ、深く理解する能力を高めることを目指します。					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	ガイダンス：与謝野晶子の生涯と作品から文学を考える。				
第 2 回	最初の歌集『乱れ髪』—浪漫派女性歌人登場—				
第 3 回	日露戦争と「君死にたまふこと勿れ」（詩）				
第 4 回	『青鞥』と「そぞろごと」（詩）—山の動く時—				
第 5 回	「戦争」（詩） —いまは戦ふ時である—				
第 6 回	「駄獣の群れ」（詩：『読売新聞』）				
第 7 回	『明るみへ』（唯一の長編小説）				
第 8 回	「何故の出兵か」（評論：『横浜貿易新報』）				
第 9 回	母性論争：「平塚・山川・山田三女史に答う」（評論：『太陽』）				
第 10 回	「文化学院の設立について」（教育活動：『太陽』）				
第 11 回	「…我等は陛下の赤子…」（詩：無題）				
第 12 回	鉄幹と共著『満蒙遊記』のころ				
第 13 回	「紅顔の死」（詩） —「第一次上海事変」に際して—				
第 14 回	「…我が四郎み軍にゆくたけく戦うへ」（歌）				
第 15 回	まとめ 「自我」と時代と文学と				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
授業で毎回指定する予習課題を学習しておくこと。 「青空文庫」で読むことが可能な作品も多いので、指定したものを事前に読んでおくことが望ましい。 授業の進行の中で適宜ノート提出を要求するので、復習として必ずノートを整理しておくこと。					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
授業中の討論への参加 (20%) 提出ノートの内容 (30%) 最終レポート (50%)	秀：晶子の適切な作品を読み解き、時代の中に位置づけ、彼女の生きざまと関連させて優れた論評を行なえる。 優：晶子の代表作を取り上げて、彼女の文学的な営みの意義を説明できる。 良：晶子の代表作を取り上げて優れた感想文を書ける。 可：授業で取りあげた作品を読み、感想を文章表現できる。
テキスト (Textbook)	【書名】 【著者】 【出版社】 【出版年】 特になし。授業時に資料配布。
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	入江春行『与謝野晶子とその時代』（新日本出版社、2003年） 赤塚行雄『決定版 与謝野晶子研究』（学芸書林、1994年） 香内信子『与謝野晶子-昭和期を中心に-』（ドメス出版、1993年）
備 考 (Other Information)	
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	一覧表参照。

科目名称 (Course Title)				担当教員(Instructor)	
簿記論Ⅱ				吉田 周邦	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	1 年次	講義	無	科目等履修
授業の概要 (Course Description)					
日商簿記 2 級（商業簿記）の初級レベルの簿記会計学を、簿記論Ⅰの内容をふり返りつつ、テキストに従ってわかりやすく講義する。 授業計画にそって授業を進め、あらかじめ受講者に次回テーマに関する情報収集や論点につき課題を与え、授業においては、講述だけでなく演習と双方向の活発なディスカッションを志向する。課題として出題されるテキストやワークブックの問題を自ら解くことが、大変重要で理解につながる。また、適宜課題レポートの提出・発表を求め、中間考査・期末試験を実施する。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
株式会社における基本的な会計処理を中心に、決算整理までの一巡の手続を理解・習得し株式会社の基礎的な財務諸表を作成できる。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	ガイダンスと、株式会社会計の特徴・簿記一巡の流れのふり返り等				
第 2 回	収益・費用取引（経過勘定等を含む）				
第 3 回	決算手続Ⅰ（試算表、決算整理、精算表の作成）				
第 4 回	手形取引（偶発債務、更改、不渡等の取引を含む）				
第 5 回	引当金（貸倒引当金、退職給付引当金等）				
第 6 回	棚卸資産と売上原価				
第 7 回	販売費及び一般管理費				
第 8 回	前半の総括・中間考査				
第 9 回	固定資産取引（有形・無形固定資産）				
第 10 回	資金取引（借入金、社債等の取引を含む）				
第 11 回	繰延資産・その他の勘定科目				
第 12 回	税金の処理（基礎）・剰余金と配当				
第 13 回	本支店会計				
第 14 回	決算手続Ⅱ（財務諸表の作成）				
第 15 回	全体の総括・期末試験				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
次回の講義に関するテキストの例題・ワークブックの練習問題を、課題として必ず自ら解くこと。実際に問題を解くことが、理解と上達につながる。					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
中間考査・期末試験点(60点) 課題レポート提出・発表 (40点) TOTAL (100点) 中間考査・期末試験の合計が 50点未 満(100点満点)の場合、単位を付与し ない。また、4回以上欠席の場合、単位 を付与しない。	秀：100点 - 90点 優：89点 - 80点 良：79点 - 70点 可：69点 - 60点 不可：59点 - 0点
テキスト (Textbook)	【書名】 新検定簿記講義2級商業簿記 【著者】 渡部裕亘、片山覚、北村敬子 【出版社】 中央経済社 【出版年】 2017年
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	渡部裕亘、片山覚、北村敬子「新検定簿記ワークブック 2 級商業簿記」 中央経済社
備 考 (Other Information)	簿記論 I を履修することが望ましい。 講義及び試験には、電卓を携行すること。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	メールによる予約。